

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

An Outline of Modernization of the Ceramic Industry in Soviet Uzbekistan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊田, 悠 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003985

ソ連期ウズベキスタンにおける陶業の変遷と近代化の点描

菊 田 悠*

An Outline of Modernization of the Ceramic Industry in Soviet Uzbekistan

Haruka Kikuta

近代化が各地でいかに進んできたかを考察する近代化論は1960年代頃から盛んになったが、旧ソヴィエト連邦ではイデオロギーや調査上の制約から、そのミクロ・レベルでの近代化の実態を検討することが難しく、近代化論における社会主義体制の意義も十分に論じられてきたとはいえない。

それに対して本稿は、旧ソ連を構成していたウズベキスタンのリシトン陶業が、ソ連時代に経験した変化を、先行研究および人類学的フィールドワークに基づいて仔細に検討する。そしてそれがどのような近代化といえるものだったのかを考察する。具体的には、20世紀初頭、1920年代から1960年代、1970年代から1991年という3つの時代区分を設定し、これに沿って生産体制、陶工の内部構造、技能の伝承という3点からリシトン陶業の変遷を追う。

その結果、まず組織の面で社会主義的生産のための大改編がなされ、1970年代になってからは技術面の近代化が進み、それに合わせて陶工間関係もゆるやかに変化してきたことが明らかになった。一方で、近代化の枠にはそぐわない技能や組織、観念も国営陶器工場内の工房を中心とした場で見られ、このような工房でのインフォーマルな活動はフォーマルな工場制度と相互補的に支えあっていた。以上のように社会主義体制下での近代化の実態は複雑な様相を持ち、今後のさらなる人類学的調査を待っている。

Using data obtained in a recent field study, this article describes some aspects of the Soviet way of modernization undergone by the ceramic industry of Rishton and ceramists there.

In order to resolve some inconsistencies and make up for the lack of

* 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程，国立民族学博物館共同研究員

Key Words : Uzbekistan, the Soviet Union, modernization, post-socialist anthropology, Rishton

キーワード : ウズベキスタン, ソヴィエト連邦, 近代化, ポスト社会主義人類学, リシトン

information identified during reviews of the major preceding studies, the author chose to divide the Soviet period into three parts: the beginning of the 20th century, the 1920s–1960s, and the 1970s–1991. Each period is analyzed according to the following indicators: the production system, the organization of groups of ceramists, and methods of passing traditional techniques from generation to generation.

This approach and the new data obtained from the field study demonstrate that there were two stages of modernization in the Soviet factory. The production system was modernized in the first stage, and pottery technologies in the second stage. The research also revealed unique features of the studio system of pottery, where traditional ways of passing technologies from masters to disciples remained.

Finally, the article makes a case for the necessity of more in-depth anthropological research of local history and changes during the Soviet Period to understand the Soviet way of modernization.

1 序	代から 1960 年代)：社会主義的生産の整備と葛藤
1.1 近代化論と社会主義体制	
1.2 ウズベキスタンにおけるソ連期近代化への視座	3.2.1 生産体制
	3.2.2 陶工の内部構造
2 対象としてのリシトン陶業	3.2.3 技能の伝承
2.1 土が養う町	3.3 ソ連時代後期 (1970 年代から 1991 年)：機械化と安定の享受
2.2 先行研究とその課題	3.3.1 生産体制
2.3 本稿の視座	3.3.2 陶工の内部構造
3 リシトン陶業の変遷	3.3.3 技能の伝承
3.1 20 世紀初頭 (1910 年代まで)：職人たちの世界	4 考察
3.1.1 生産体制	4.1 ソ連時代の変化
3.1.2 陶工の内部構造	4.2 近代化という尺度から
3.1.3 技能の伝承	4.3 結びに代えて
3.2 ソ連時代前期および中期 (1920 年	

1 序

1.1 近代化論と社会主義体制

本稿は二つの目的を持っている。ひとつは、これまでほとんど明らかにされてこなかった、ソ連期ウズベキスタンにおける地域社会のミクロ・レベルの変容実態を解明することである。二つ目は、その変容を近代化という尺度に照らし合わせ、社会主義体制における近代化という問題系の重要性を明らかにすることである。

そもそも、近代とは何であり、どの時期を指すかという点に関して、研究者の意見は様々に異なっている。だが、それが対象として非常に重大であることは文化・社会人類学を含む人文・社会科学一般において広く認識され、長年にわたって深い関心が寄せられてきた。その政治経済の特徴に関する最大公約数的な解釈は、「西欧近代をモデルに、封建的共同体的な社会が貨幣経済の流通や科学技術の進歩により開放・解体され国民国家や市民社会の形成にむけて改編される」（石原 2002: 124）ということになるであろうし、ここに、更に啓蒙主義や科学主義などを加えて近代の特徴あるいは近代性とする研究者も多い。

しかし、近代でも近代性でもなく、そこに至る過程という意味での近代化というものが本格的に議論され始めたのは、ようやく 1960 年代になってからである。これは、当時日本やソ連といった非西欧の国々が第 2 次世界大戦後の復興を果たし、かつての植民地の多くが独立国として歩みを続けた結果、近代的とされる諸国家が様々に異なる相貌を持ちうる事が明らかとなり、それをどのように説明するかという問題が浮上したためである（ホール 1961: 41）。また、新独立国家群において西欧化という言葉が反発を買うようになったために、近代化という、より穏当な言葉遣いへ移行したとする指摘もある（Rukavishnikov 1996: 40）。

この当初の近代化論においては、近代化をどう規定し、その一般理論は何であるかという点が重要であった。そこでは、近代化とは、読み書き能力と科学的合理的な生活態度の普及、人口の都市集中と社会が都市を中心として組織されていくこと、商品流通の発達とエネルギー使用の増大、社会成員の広範な空間的相互作用と経済的および政治的過程への広範な参加、マスコミの広がり、政府や企業、工業の大規模化とその編成の官僚化、国民国家の確立と国際社会の相互作用の増大といった特徴の総体であるなどと論じられた（ホール 1961: 44-45；高島 1968: 16-17）。ここで注目すべきは、このような近代化という現象を、資本主義化と同一視するべきか否かという議論が

あった点である。社会学におけるこの動向を概観した高島によれば、近代化を資本主義化に等しいと見る研究者もいたが、近代化を様々な段階の形態や古い共同体が産業化あるいは市民社会化する過程であるとより緩やかに捉える見方が、次第に有力になったという（高島 1968: 27-31）。そしてこの見解では、近代化には国家体制によって様々な道があるとされ、社会主義体制も近代化の考察にとって欠かせない対象と見なされたのである。

しかし、社会主義体制の筆頭格と見なされていた旧ソヴィエト連邦やその勢力圏における社会の研究は、大別して二種の困難を伴っていた。ひとつは、内部の研究者にとっては公的イデオロギーに反する分析結果を主張しがたいという困難である。例えば、一般の人々の生活を対象とした調査をし、ソ連体制下での変化を考察した分野としてソヴィエト民族学¹⁾があるが、そこではデータの分析において教条的マルクス＝レーニン主義による制約が強く、政策を補強するための主張やイデオロギー上の理想像の描写が優先されるなどの問題点が少なくなかった（Dunn and Dunn 1974; Khazanov 1990; Sadomskaya 1990）。二つ目の困難は、外部の研究者がソ連内で移動や観察対象の制約を受けずに調査することが難しかった点である。このため非社会主義国、いわゆる西側の人類学者はソ連内で直接人類学的フィールドワークを行なうよりも、ソヴィエト民族学者による調査結果を情報源とすることが多かった。

この状況は、公開性を理念としたペレストロイカ政策の進んだ 1980 年代後半から変化し、シベリアや東欧では、西側研究者に対して門戸が開かれるようになった。ソ連崩壊後の 1991 年以降は、他の地域での調査可能性も広がった。そして、旧ソヴィエト民族学の側もイデオロギー上の制約から解放され、西側の研究者との対話が進むこととなった。このような中で、かつて資本主義圏と共に「世界を二分した」これら社会主義圏を「ポスト社会主義人類学」として共通の問題意識で取り上げていこうとする動きが出ている（佐々木 2004）。その問題意識とは、人類学的な手法を用いて、資本主義圏とは異なる 20 世紀の経験やディシプリンの働きを見ることで、既存の「市民社会」「国家」「民族」などの社会学的諸概念を問い直し、鍛えなおそうというものである（松前 2003；高倉 2000；渡邊 2002, 2003；Hann(ed.)2002）。

本稿はこの主張に賛同しつつ、ソヴィエト社会主義体制における近代化の実態と特徴の解明を問題意識としている。それは、従来の近代化論では、社会主義体制の果たした役割とその特徴について未だ十分に論じられてきたとはいえないからである。社会主義体制がもはや少なくなったからといって、この点をおろそかにしたまま近代化や近代について論じて、それは片手落ちになってしまうだろう。社会主義体制下で

の近代化は、多くの人々の生活に現在も影響を与えていると思われる。そして、そこで展開してきた近代化に関する実証的研究は、調査地や文献資料へのアクセスが拡大した今こそ、更に活発になされるべき分野なのである。

また、「ポスト社会主義人類学」を始めとして、人々の生活における社会主義時代の経験を問う研究は徐々に進んできているが、それが資本主義体制と比べての対象の特殊性に注目するのみで終わってはならない。単に特殊性の指摘で留まれば、ポスト社会主義圏の研究は他地域に対して閉じられたものとなり、マイナー化していくばかりであろう。従って、あえて近代化という共通の尺度に照らすことで、ポスト社会主義圏を越えた比較の可能性を広げることには大きな意味があると考えてるのである。他地域と比較することで、「社会主義的近代化」や「ソヴィエト的近代化」といったポスト社会主義圏の特性が、逆によく見えてくることも期待できる。

本稿はこのような問題意識に基づき、ウズベキスタンにおける陶業とそれを生業とする陶工たちがソ連時代にどのような変遷を経てきたかを、文献資料と2002年から2004年にかけて行なった人類学的フィールドワーク²⁾で得たデータに基づいて取り上げる。そしてその変遷はどの程度、近代化と呼びうるものであったのかを考察したい。では、まず次節で近代化の概念を整理し、ウズベキスタンにおけるいくつかの人類学的な先行研究を近代化論の中に位置づけておこう。

1.2 ウズベキスタンにおけるソ連期近代化への視座

我々はここで、近代化論初期のある論考に依拠しながら、近代化の概念を今一度整理してみよう。そしてウズベキスタンにおけるソ連時代の近代化に関する研究と照らし合わせ、その成果と不備を明らかにしておきたい。

1960年代の日本の社会学で近代化を論じた一人である高島は、「近代化とは何か」と題した論考において、それを「技術の近代化」、「組織の近代化」、「人間の近代化」という3点から捉えることを提唱した。そこでは技術とは、生産のみならず流通やサービス、マスコミや交通、政治、教育における技術でもあるとされる。しかし、特に生産に関する技術の発達、近代化の第一の動因として妥当であり理解しやすいという(高島1968: 20)。つまり「技術の近代化」の一番の特徴は、非生物的エネルギーや機械などの利用によって効率よく製品を大量生産できるようになること、と表現できよう。

次に、「組織の近代化」における組織とは、企業や政党、宗教団体、大学やクラブなど「一般に人間が相互に社会関係を結んで、そこで技術を活用する歴史的社会的な

場」(高島 1968: 22)と定義され、その「いわゆる体質改善」(高島 1968: 22)が「組織の近代化」であるという。この点をもう少し解きほぐしておく、人々が血縁や身分などに基づく関係から、平等な機会に恵まれた個人として契約や自身の意志に基づいた関係を社会での活動の中心としていくという人間関係の変化と、組織の運営がリーダーの恣意などから科学的合理性を基盤にした規則と成員の広範な参加に基づくように変化することが、「組織の近代化」であると考えられる。

そして最後に、「人間の近代化」においては、個人が主体性を確立し、識字力や科学的合理性を身につけることが近代化の要点であるという(高島 1968: 26)。これは「個人がその環境に対して、非宗教的かつますます科学的に対応していこうとする志向の伸張」(ホール 1961: 44)とも表現されている。これら技術、組織、人間の近代化は相互に関連し、規定しあって、どれがその社会における近代化の決定的な機動力となるかは場合によって異なるという(高島 1968: 26)。

この3つの観点は、ウズベキスタンにおける近代化を考察する上でも、示唆するところが少なくないであろう。現在のウズベキスタンの領土は、20世紀初頭にはロシア帝国の勢力下にあり、封建的領主を戴くブハラ・アミール国(1756年-1920年)、ヒヴァ・ハン国(1512年-1920年)、そしてロシア領トルキスタン総督府(1867年-1917年)が位置していた。それが、1920年代のソヴィエト連邦の確立によって、ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国として近代国家の体裁と産業の整備が進み、教育や医療水準の著しい向上をみた。ソ連のイデオロギーと政策は、民族の定義やその民族別に画定された現在の国境線にも、コルホーズ、ソフホーズのような国家と地域共同体を結ぶ組織にも及び、男女のあるべき姿や、ウズベキスタンで大半を占めるムスリムにとって重大なイスラームの社会的位置づけにも深く関わってきた。このようにソ連時代にウズベキスタンで起こった数々の重大な変化は、近代化の尺度にどの程度当てはまるものなのであろうか。

まず、「技術の近代化」という観点からは、統計資料などに基づいた従来のマクロ・レベルの研究によると、ソ連体制によってそれが大幅に進んだとするのが定説となっている。1920年代末から1930年代の農業集団化と化学肥料や農耕機械の大規模な導入、大フェルガナ運河を始めとする灌漑水路の整備、1920年代に始まり第2次世界大戦中のヨーロッパ部からの工場や労働者の疎開を契機に更に進んだ工業化、識字率の急激な上昇と技術者の増加などが、ソ連時代の主な「技術の近代化」の成果とされる(木村 1999: 11-19; 中村 2004)。ただしそこには、農業集団化の際の膨大な人的犠牲や、綿花栽培に特化して水資源を大量に使用し、アラル海の縮小などの環境問題を

引き起こしたといった負の側面も指摘されている。

これに対し、ミクロ・レベルの生産現場で使われていた技術に関しては、研究例はまだほとんど見当たらない。そこには、必ずしも近代化の図式にあてはまるとはいえない事態も予想される。例えば、ウズベキスタンの事例ではないが、東シベリアのヤクーチアにおけるトナカイ飼育を仔細に観察した高倉によれば、トナカイ群の飼育管理技術には、「社会主義的近代化のなかで全く独自に導入されたものではなく、むしろ革命以前との技術的な連続性」（高倉 2000: 112）を見出すことができるという。本稿が対象とする陶業でも、陶器生産の現場における技術がどこまで効率や、大量生産、機械化などを旨とする近代化に沿ったものであったのかは重要なポイントである。大切なのは、制度の表面的な変化やソヴィエト政権による技術発展の宣伝に惑わされて、生産現場における過去との連続性を見失ってはならないということであろう。

「組織の近代化」と「人間の近代化」という点に関しては、より錯綜した事態が報告されている。まず、「迷信や伝統の束縛を絶ち、民族の差異を乗り越えたソヴィエト人の創設」という政権の公的イデオロギーに沿ったソヴィエト民族学者は、「中央アジアの諸民族は融合してソヴィエト人として統一した意識を持つようになった」（Bromley and Kozlov 1989）と主張し、「迷信が根絶され、宗教という誤ったイデオロギーも消えつつある」（Bikzhanova, Zadykhina, and Sukhareva 1974[1962]）、「女性の開放が進み、近代的な労働者として闊歩している」（Zadykhina 1963[1960]）などと近代化の成果を強調する場合が多かった。しかし、ソ連末期には、「イスラームや慣習は非常に根強く、ソヴィエト体制に敵対するまでになっている」（Poliakov 1992[1984]）あるいは「伝統的とされる割礼儀礼が、ソ連社会に適応したコネ作りの一手段として展開している」（Koroteyeva and Makarova 1998）などと公的イデオロギーと現実の相違点も指摘されるようになった。そしてソ連崩壊後に、西側の研究者による現地調査や資料へのアクセスが進むと、いっそうかつての単線進化論的なイデオロギーでは現実を語れないとする主張が増加している。

このうち、「組織の近代化」に関しては、マハッラ (*mahalla*) と呼ばれる街区共同体を対象とした研究が目立つ。これは中央アジアの定住地域において古くから見られる、通りや地区ごとに形成された小共同体である。ウズベキスタンでは独立以後、国からマハッラに住民の福祉や管理に関する機能の一部を委託する政策が採られたこともあって、研究者や国際援助機関の間でマハッラが注目され、盛んに研究対象とされてきたのである。そして「近代化に関する公的イデオロギーと実際の生活をつなぐ媒介としてのマハッラ」（Abramson 1998）、「慣習経済が営まれ続けてきた場としてのマ

ハッラ」(樋渡 2004), 「国家の制度や規範を浸透させる機構としてのマハッラ」(須田 2005) など, マハッラの多様な側面が, 人類学的フィールドワークも一部に取り入れて研究されている。しかし, その総合的な研究はまだ途上にあるといえよう。

「人間の近代化」に関しては, イスラームやジェンダーに関して議論がなされている。だが, 中央アジアの社会におけるイスラームの役割を, 政治的側面に限らずミクロ・レベルの調査も行なって考察しているものは, それほど多くない。そのような中で, ウズベク人も多いカザフスタン南部での長年のフィールドワークに基づいた(Privratsky 2001) は, 貴重な論考といえる。ウズベキスタンでは, イスラームを正義の源泉として期待する一部の人々についての報告(Ilkhamov 2001) などが見られる。ジェンダーに関しては, ソ連時代初期の「女性解放運動」がどのような内実であったかを現在の人々の語りなどにも注目して論じる(Kamp 2001; Northrop 2004) や, 今日のジェンダー状況における多様な女性像について考察した(Akiner 1997) などが挙げられる³⁾。

こうしてみると, イデオロギーの制約を離れ, ミクロ・レベルの日常生活に分け入ってソ連時代におきた近代化の実態を問う研究は, ウズベキスタンにおいて近年ようやく本格化したばかりであることがわかる。そのような現状では, まだ技術, 組織, 人間という3観点の近代化の連関についても, ほとんど解明は及んでいない。ここには, 近代化をめぐる大きな未開拓の分野が存在するのである。本稿はそこに補助線を引き, 少しでも埋めることを目指したい。具体的には, ウズベキスタン東部に位置するリシトン市(*Rishton shahri*)⁴⁾の陶業とそれに携わる人々が, ソ連時代にどのような変遷を経てきたかを, 文献とフィールドワークによって得たデータを基に, 丹念に見ていく。その上で, それが技術, 組織, 人間の近代化という観点からはどう捉えられるかを考察していくこととする。

構成は, 第2章でウズベキスタンのリシトン陶業に関する先行研究を概観し, 本稿の分析の視点を提示する。第3章では, ソ連時代のリシトン陶業の変遷を3期に分けて, 生産体制, 陶工の内部構造, 技能の伝承という3点から検討していく。第4章ではそれを技術, 組織, 人間の近代化という観点から考察する。なお, ウズベク語, タジク語, ロシア語の表記についてはいずれも『中央ユーラシアを知る事典』(小松他監修 2005: 592-593) に従ってラテン文字に転写した。陶業に関するウズベク語とタジク語の語彙は共通することが多く, リシトンは複数言語話者がほとんどで, 両者の区別があまり意識されていない。この点を考慮して, 本文中ではウズベク語とタジク語を厳密に分けずに, 双方とも人名以外はイタリック体で表記した。また, 引用やイ

インタビュー文中の〈〉内は筆者による補足である。インタビュー文には、末尾にそれを行った日付と話者のイニシャルを付した。

2 対象としてのリシトン陶業

2.1 土が養う町

ウズベキスタンはユーラシア大陸の中央部に位置する（図1および表1参照）。その領土は東西南北を結ぶ交易の結節点として、古くから多くの人や文物が移動し、ペルシアや中国など周辺の文明地の影響を受けて刺繍、漆塗り、絹織物、絨毯、木工、銅細工など数々の工芸が発達してきた。なかでも、ウズベキスタン東部のフェルガナ盆地⁵⁾（図2参照）は、周囲の山々より流れ込む水系に恵まれた地で、肥沃な農業地帯として人口が集住しており、19-20世紀には各町村に特有の手工芸が発達していることが知られていた（Peshchereva 1959: 312）。その中で今⁶⁾も続くのは、マルギランの絹織物、コーカンドの木工細工、そしてリシトンの陶業などである。陶業は他にもグルムサライ、アンディジャンなどで若干見られるが、19世紀においても現在でも、リシトンがウズベキスタンで最も多くの陶工数と生産量で知られる。

リシトンは行政区分上ではフェルガナ州 (*viloyat*) リシトン郡 (*tuman*) の中心の市 (*shahar*) である。人口約3万人、民族構成は郡全体ではウズベク人が11万2300人（約78%）、次いでタジク人が2万3200人（約16%）である（Iqtidosiyot... 2001）。リシトン市内ではタジク人住民が8割を占めるといわれる。このタジク人は、慣習においてウズベク人とほとんど差はなく、通婚も日常的に行なわれている。ただ、母語がチュルク語系のウズベク語とは違って、基本的にペルシア語系のタジク語なのである。しかし、リシトン市内の住民は、ウズベク人でもタジク語を日常会話程度ならば問題なく話せることが多く、タジク人の間でもウズベキスタンの独立以後はマスメディアや教育でウズベク語が主流になっているため、ウズベク語使用が広がっている。この他、ソ連時代からロシア語で教育を受けてきた人々もいる。つまり、一人で2つか3つの言語を操ることが日常的に見られる地域である。宗教は、タジク人、ウズベク人、クルグズ人、タタール人はムスリム（イスラーム教徒）である。しかしクルグズ人とタタール人は少数で、他にロシア人と高麗人も少数派の住民である。気候はステップ性であり、冬は摂氏でマイナス5度から10度に下がるが、夏は40度を越える。雨は少なく、春にやや多く降る。郡全体の主要な産業は農業で、綿花と穀物、野菜、果物などを作っているが、リシトン市内は陶業が盛んである。

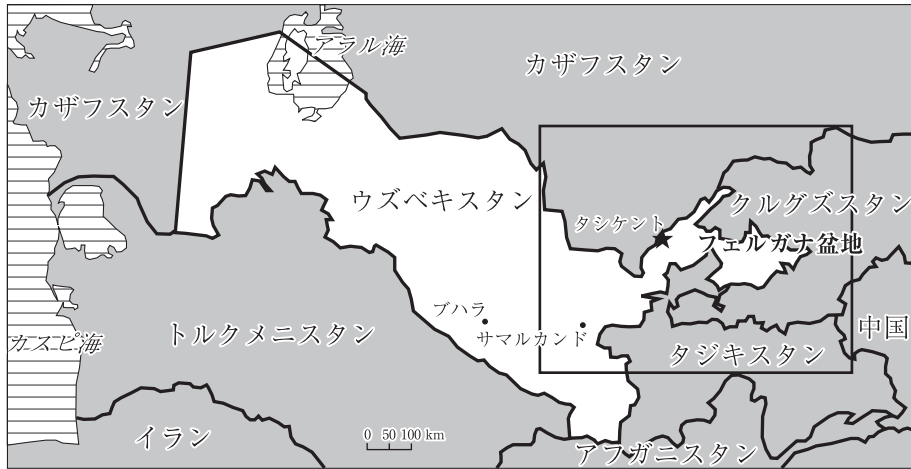


図1 ウズベキスタン共和国 (CIA Factbook 2005 をもとに作成)

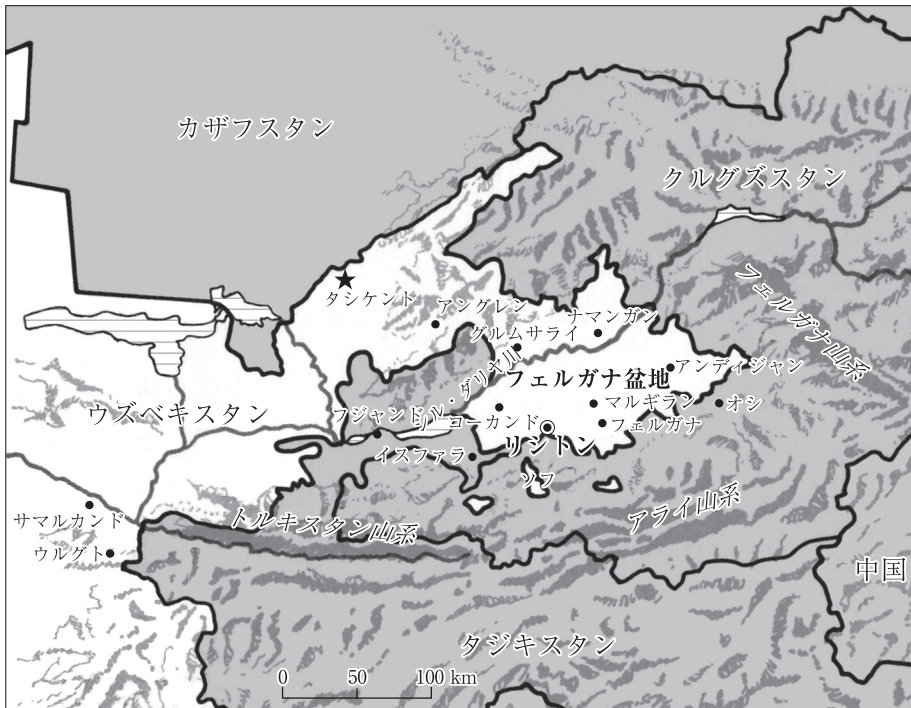


図2 フェルガナ盆地 (Nunn, Rubin and Lubin 1999: 2 をもとに作成)

表1 ウズベキスタンの概要 (CIA Factbook 2005)

面積	44万7400 km ²
人口	約2640万人
主要言語	ウズベク語, ロシア語
主な民族	ウズベク人 (80%), ロシア人 (5.5%), タジク人 (5%) など
主な産業	農業 (綿花, 穀類など), 鉱業 (金など), 織物, 機械工業
主な宗教	スンニー派を主としたムスリム (88%), 東方正教会 (9%)

ユーラシア大陸中央部ではおよそ8世紀に施釉陶器の生産が始まり, 9世紀には生活の中に広く取り入れられたという (Zhadova 1974: 15)。リシトンでは1980年代末に行われた市内の廟の再建工事の際に, 9世紀の地元製と見られる陶片が発掘されており, その頃から陶業が行なわれていたといわれる。リシトンで陶芸が発達した理由は, まず原料となる陶土が良質かつ豊富である点に求められる。赤い陶土が, 1-1.5メートルの深さに0.5-1メートルの厚さの層を成して市内一帯に分布しており (Rakhimov 1961: 23), 家の庭を掘ることで陶土が採集できたのである。陶土に加えて, 釉や顔料などのための原料を入手することも比較的容易であった。釉にとって必須である石英はソフヤグルムサライから採取され, 石英の粉は近郊の川で採ることが出来た。焼成すると白色になる化粧土は, イスファラ, アングレンなどのものが用いられた。マンガンや鉄分が豊富な化粧土はリシトン近郊の山から, 銅はコーカンドから入手していた。唯一, 青色の顔料となるラピスラズリは近郊になく, 遠くバダフシヤンの山々あるいはイランから取り寄せていたが, 後には工場製のコバルトが取って代わるようになった。そして陶器に柔らかな輝きと透明なつやを与える釉として重宝された, イシコール (*ishqor*, 本来の意味はアルカリ) と呼ばれる灰釉の原料となる草は, 毎年決まった時期に近郊の荒地などで丁寧に採取された (Kodzaeva 1998: 3; Rakhimov 1961: 34-36)。

ところで, 14-16世紀のティムール朝時代のサマルカンドでは, 支配階級の間で中国の青磁や青花磁器に魅了された者が少なくなかった。そのため, 青花磁器を真似て白地にラピスラズリやコバルトを用いて青で彩色した釉下彩陶器がその版図各地で生産されるようになった (杉村 1999a: 1; 杉村 1999b: 116)。それら窯元では中国とは異なってカオリン入りの陶土や高温での窯焼きの技法を持たず, 真正の磁器を生産することはできなかった。しかし, 陶土を工夫することで白地に藍彩を施した軟質の半磁器が製作され, 「チンヌ」 (*chinni*) つまり「中国の」様式と称された (Zhadova 1974:

13)。

そして19世紀になると、リシトンがこのチンヌの産地として名を馳せ、中央アジア陶器生産の中心地の一つとして浮上してくる。チンヌはリシトンへサマルカンドから伝播したという説がある一方、カシュガルで修行してきた陶工がもたらしたともいわれる。リシトンの他にも、19世紀にはフェルガナ盆地のコーカンド、アンディジャン、ナマンガン、フジャンドなどでチンヌ生産がなされたが、リシトンのものは質の良さと豊富な文様でフェルガナ地方の富裕層を中心に大きな需要があったという(Peshchereva 1959: 230)。こうしてチンヌが盛んに作られた19世紀後半から20世紀初頭にかけて、リシトン陶芸はひとつの黄金期を迎えたのである。

チンヌは飾りや贈り物用の高級食器として人気を博したが、リシトンではチンヌ以外にも様々な製品を産出していた。チンヌほど硬質ではなく、より安価で日常使いに適した白や黄色、赤色の陶器類で、洗濯や料理に欠かせなかったたらい、ミルクや肉を保存する中鉢、髪を洗う鉢などである。そしていろいろなサイズの平皿や碗は、当時も今も生活に欠かせない。その他にも釉を必ずしも必要としない製品も多数作られていた。例えば、穀物や飲み水を保存するためのつぼである。また、中央アジアの定住民の主食であるナン (*non*) は、タンディル (*tandir*) という釉なしの土製の窯で焼くが、このタンディルも古くからリシトンの名産である。

さて1899年にタシケントとフェルガナの間に鉄道が開通すると、ロシアからフェルガナ盆地へ工場製の磁器が大量に入ってくるようになった。そして、その丈夫さと安い値段でリシトン陶器の市場を脅かすこととなった。20世紀初頭にはタシケントでの陶器生産の興隆によっても、リシトン陶器はウズベキスタン北部や中部の市場を失った(Rakhimov 1961: 22-23)。やがて革命とソ連体制確立期の混乱した情勢を経て、チンヌの製法はほとんど忘れ去られてしまう。しかし、日用陶器は作られ続け、ソ連時代にはリシトンにウズベキスタン最大の製陶工場が操業することになる。ソ連崩壊後の今日もリシトンでは人口の2-3割程度が陶業に携わり、特に男性は一生に一度は陶器作りを習うと言われている。ある住民は「リシトンは土が養う町だよ」と語ったが、的を射た表現ではないだろうか。

2.2 先行研究とその課題

前節で見てきたようなリシトンの陶業に関しては、ソ連時代に著名な先行研究が幾つかなされている。ここではそれらを概観し、リシトン陶業のソ連時代の変化と近代化の関係について手がかりとなる点をまとめておこう。

リシトンを含む中央アジアの窯元について、20世紀の様子を中心に述べた研究書といえば、ソヴィエト民族学者ペシエレヴァによる *Goncharnoe proizvodstvo Srednei Azii* (中央アジアの製陶業) (Peshchereva 1959) がまず挙げられる。これは1940–1950年代の調査に基づいたもので、約400頁に渡る大部の著である。そこでは中央アジアの陶業がタジキスタン山岳部の女性たちによる自家用の製陶と、オアシス都市の男性職人による商業用の製陶に大別され、リシトン陶業は後者に分類されている。そして主要な製法、製品の歴史、陶工の社会組織が文献資料や聞き取りと観察を基に記されている。ペシエレヴァはタジク語やウズベク語を駆使して長老らから聞き取りを行った。その具体的で細部に渡る記述は非常に信頼性が高い。後の一連の中央アジア陶業の研究書も必ずこれを参照する「定番」となっている。本稿では、特に20世紀初頭のリシトン陶業の様相を述べる際、この書に多くを負っている。

この著作の特徴は、事実関係の記述が長く続き、分析や考察は控えめになっている点である。そこには他のソヴィエト民族学の著作によく見られるようなソ連時代以前の慣習への批判も、あからさまな体制賛美の表現も少ない。しかし、ソ連時代に起きた陶業の変化について述べている箇所からは、筆者がそれらを当然起こるべき進歩として評価していたことが読み取れる。その変化とは、本稿の問題意識と絡めて表現するならば、「組織と人間の近代化」といえるものである。

そもそも中央アジア定住地域の職人世界については、ブハラの研究で名高いスーハレヴァら他のソ連の研究者も調査している。そこでは、「職人の師匠は家父長的で弟子を従属させた」(Mukminova 1976)、「両者の関係は封建的であり、20世紀初頭には資本主義的な搾取の萌芽も見られた」(Sukhareva 1962)といった職人間の「封建的な人間関係」への非難が見られる。ペシエレヴァも、かつてのリシトンの陶工間にこのような「封建的な人間関係」を想定しており、それがソ連時代になって互いに平等で開放的な関係へと変化したと報告している。それによると、1948年と1950年のリシトンでの調査では、陶器を作っている工房の様子には二種類があった。その一つでは、以下のように作業班の全員が親方の命令におとなしく従う、ソ連時代以前の陶器作りを髣髴とさせる光景が見られたという。

熟練した年長の親方の前で若者たち——しばしば親方の息子や親戚だった——が、働き、学んでいる。そのそばには少年の弟子たちが立っている。〈中略〉このような年長の親方と見習いの若い親方たち、弟子たちがひとつの作業班を形成している。その互いに対するふるまいと働き方は古い工房に似ており、それが巨大な作業場の装置に組み込まれたかのようなものである。〈中略〉この作業班では全員が親方の権威に従属している (Peshchereva 1959: 210)。

他方、若者たちで構成された工房では、メンバーが互いに平等で自由闊達な雰囲気や包まれていたという。

このような作業班では古い工房の雰囲気は既に全くない。〈中略〉仕事は楽しい会話や歌、冗談の下で行われている。(Peshchereva 1959: 211)。

ペシェレヴァは続けて、新しい世代の間には、古めかしくて厳格な親方と弟子の関係を批判する者が多いことを指摘している。そこには彼女の、工房内での新しいタイプの人間関係に対する期待が読み取れる。

また、「人間の近代化」に関しては、かつての陶工によって信じられ実践されてきた陶器作りにまつわる様々な儀礼や慣習が、調査時には若い陶工たちの物笑いの種になり、廃れていることを報告している (Peshchereva 1959: 352, 359)。そしてこれらの慣習について「あと 10 年早くリシトン进行调查していたら、もっと様々なことがわかっただろう」(Peshchereva 1959: 361) と研究者として嘆息するが、全体として「社会の進歩に伴ってこのような「人間の近代化」は避けられない事態である」という単線進化論的な世俗化を自明とする社会理解が見られるのである。果たしてこの見解が受け入れ可能なものかどうか、我々は次章の事例検討を通じて考察することになるだろう。

次に、ペシェレヴァのものと近い時期に出版された *Khudozhestvennaya keramika Uzbekistana* (ウズベキスタンの芸術的陶器) (Rakhimov 1961) は、19 世紀末から 20 世紀半ばにかけてのウズベキスタン各地の陶業について、技法を中心に詳細に記述している書である。著者は自身も陶芸家であるウズベク人の研究者ラヒーモフであり、これも記述の信頼性が高い良書といえる。

ラヒーモフの主張で注目すべきは、技術と芸術性の点から著書刊行当時のリシトン陶業を「かつてより劣っている」と評価している点である。以下の引用にはそれが表れている。

フェルガナ盆地の住民は皆、喜んでリシトン陶器を買った。それは地元の陶器の中で最も質が良いと見なされていた。この人気は今日失われていて、現在のリシトン陶器は技術的にも芸術的にも、質は明らかに 19 世紀末から 20 世紀初頭のものに比べて劣っている (Rakhimov 1961: 82)。

しかし、ラヒーモフは、リシトン陶器の質がなぜ劣ったかについて直接は述べない。ただ、1920 年代から集団で陶器を作るシステムへ移行していき、1960 年代には 100 人単位の作業班で陶器製造を行なうに至ったなどの大規模生産化の経緯を淡々と記述

している (Rakhimov 1961: 21)。そして、その流れの中で、かつてのリシトン陶器に特有の風情を与えていた灰釉のイシコールがより簡便な鉛釉へと取って代わられたことや、1930年代から40年代にかけて新しい陶器スタイルを生み出そうとした試みが失敗したことを述べている (Rakhimov 1961: 83)。

このラヒーモフに類する所見が見られるのは、1974年に出された図録と論文集 *Sovremennaya keramika narodnykh masterov Srednei Azii* (中央アジア人民職人の当代の陶器) (Zhadova 1974) である。そこでは豊富な写真で各地の陶器が紹介されている他、数本の論文が寄せられている。そのひとつでは、ソヴィエト民族学者ジャドヴァが当時のリシトン陶業に関して、質の低下を指摘している。

リシトンはフェルガナ地方の陶業の発祥地だが、残念なことに戦後は徐々にその名声を失っている。リシトン陶器はいっそう質を落としている (Zhadova 1974: 21)。

ラヒーモフの著作と同じく、ジャドヴァも質の低下の原因をはっきり述べない。ただ、1970年代当時のリシトンで作られている大衆向けの製品が、19世紀から20世紀初頭にかけて生産された製品の質や特徴を失っていることが指摘されている (Zhadova 1974: 126)。

本稿では、このようなラヒーモフとジャドヴァの記述は、ソ連期に進んだ大量生産と効率を旨とする「技術の近代化」が、製品の質の向上につながっていないことを暗に示唆するものではないかと考える。そしてこのような「技術の近代化」の内実に関しては、次章でさらに検討していかなければならない。

最後に、学術書ではないがリシトン陶業について書かれた本として、ジャーナリストのブルハーノフによる *Rishton mo 'jizasi* (リシトンの奇跡) (Burxonov 1983) も興味深い。これは、ロシア語で書かれた上述の著作群とは異なり、ウズベク語で書かれている。そしてウズベキスタンの誇るべき伝統としてリシトン陶業を讃える内容となっており、民族文化への注目が高まった当時の状況をうかがうこともできる。

そこでは、「遅れていた以前の陶業に比べて、ソ連時代の発展は素晴らしい」とする現状肯定の、ソ連体制を讃える記述が随所に顔を出す。「〈ソ連時代に〉人民の工芸には息吹が吹き込まれ、陶工の名誉はウズベキスタンだけでなくソ連邦と外国にまで広がった」(Burxonov 1983: 5) という具合である。そして経営の適切さとそれによる製品の出荷量増加、陶工間の良好な関係が繰り返し強調されている。

工場の組織されたエンジニア部とソヴィエト組織が常に支援し、工場のスタッフが新たな栄光へと刺激されていることから、1975年には175万4千ルーブル (通貨単位) の製品

が産出された。工場ではこの時、60種類以上もの製品を作って生産ラインに乗せた。工場の拡大と生産プロセスの機械化のおかげで、1976年は300万ルーブル以上の製品が作られた (Burxonov 1983: 22)。

ムロダリ氏は班長になって働いている贈答品部へ、我が子のようになった若者と娘たちの前へと急いでいる。その心を若々しくし、寿命を延ばし、顔につやを与え、目に光をもたらしているのはこの幸福な若者と娘たちに他ならない！

若者たちもムロダリ氏を自分の父親のように尊敬している。彼を好み、秘密を話したり、知らないことを遠慮せずに聞いたりする (Burxonov 1983: 45-46)。

このような陶業の技術的発展や運営の効率性、工場内の陶工間関係の良好さに関する主張は、ソ連期の近代化に対する手放しの賛美といえる。だが、我々はこれを実態の率直な反映というよりは、多分に公的イデオロギーに沿った宣伝的なものと見るべきであろう。そしてこのような主張からプロパガンダ性を差し引き、別のデータと照らし合わせながら用いなければならない。

2.3 本稿の視座

これまで見てきたリシトン陶業に関する先行研究からは、ソ連時代に生産の社会主義的改編がなされたこと、技法も様々に変わったこと、陶工の慣習や儀礼の消滅、搾取的ではない陶工間関係が構築されたといった主張が読み取れたのであった。それらを参考にしつつ、フィールドワークによるデータを交えて、どのようにソ連時代のリシトン陶業の変化を検討していくべきかを以下に述べたい。

まず、時代区分としては、20世紀初頭から1910年代までを第1期、ソ連邦が成立した1920年代から1960年代までを第2期、そして1970年代からソ連崩壊までを第3期に分けてみよう。これにより、ソ連以前の陶業と社会（第1期）が、ソ連体制の確立期（第2期）を経て体制の安定期（第3期）に至ったという大まかな流れが把握しやすくなることを狙う。これは、ソ連時代を、指導者の個性が強く発揮されたスターリンやフルシチョフの時代と、官僚制が発達して指導者もその枠を越えなかったその後の時代に分けるというソ連史の常識にも、ほぼ適合する。また、各時期で何がどの程度変化してきたかを的確に捉えるために、生産体制、陶工の内部構造、技能の伝承という3点に特に焦点を当てて記述していくこととする。

さらに、フィールドワークで得られたインタビュー内容も字数の許す限り積極的に提示した。そこには、体制が要求する枠に必ずしも収まらない陶工たちの現場での活動がうかがえ、上述の先行研究などでは表に出てこなかった現実の葛藤が表れている

だろう。

本稿の仮説としては、リシトン陶業はまず組織の面で、第2期に大きな変化を遂げたと考える。社会主義の理念を人々の間に広め、社会主義的な生産体制を確立するなどの目的に沿って、強制を伴って改編されたのである。しかし、それは必ずしも「組織の近代化」の枠に沿うものではなく、そこに当てはまらない組織運営や人間関係も多々見られ、体制のイデオロギーがうまく浸透しない状況があったと思われる。また、第2期の組織の改編に伴って「技術の近代化」や「人間の近代化」が一気に進んだわけでもなかった。「技術の近代化」が大幅に進んだのは第3期になってからである。そして陶工の人間関係は、これら変化の全体の中でゆるやかに変化していった。ただし、近代化の枠にそぐわない人間関係や慣習が温存される場も在り続け、「人間の近代化」がどこまで進んだかは大いに疑問の余地があろう。

では、次章で、20世紀初頭からソ連時代末期にかけてのリシトン陶業の変遷を見ていくこととする。

3 リシトン陶業の変遷

3.1 20世紀初頭（1910年代まで）：職人たちの世界

20世紀初頭のリシトンは、1876年に設置されたロシア帝国トルキスタン総督府のフェルガナ州の管轄下にあった。当時リシトン陶器の中では、チンヌと呼ばれる半磁器が高級品として有名であり、その他にもマハツラごとに、特色ある日用陶器が手作業で作られていた。それをヴォーフルシ (*vofurush*) と呼ばれる卸売商人がロバ車で仕入れてまわった他、陶工たちも時には自らロバ車に商品を積んで近郊の町村や市場に売り歩いていた (Peshchereva 1959: 209)。そこには、独特な職人たちの世界が広がっていたのである。本節ではその様子を見ていこう。

3.1.1 生産体制

当時、陶工はクロール (*kulol*) と総称されていたが、その中でも釉を施した平皿や碗を作る者はタヴォクチ (*tovoqchi*) と呼ばれ、釉をあまり施さない水がめやパン焼き窯を作る人々はクザガル (*ko'zagar*) と呼ばれて区別されていた (図3参照)。両者は互いにライバル意識を持っていて、タヴォクチは自分たちの方が収入が多いことを自負し、クザガルは歴史の古さを誇りとしていた (Peshchereva 1959: 344)。また、陶工の親族の女性が絵付け作業などを手伝うことはあったが、陶工と見なされるのは

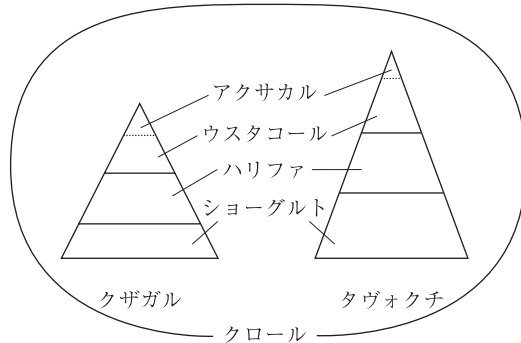


図3 20世紀初頭のリシトン陶工の内部構造図（クザガルとタヴォクチの三角の大きさの違いは、人数の違いを表す）

ほとんど男性のみであった。

タヴォクチとクザガルの集団の内部には3つの階層があった。それは陶器を作る現場である工房の持ち主たるウスタコール (*ustakor*) と、一人前に全工程をこなす技量を持つが自分の工房がなくウスタコールに雇われて働くハリファ (*xalifa*)、そして弟子として仕事を見習い中のショーグルト (*shogird*) であった⁷⁾。工房は現地でドウコン (*do'kon*) と呼ばれ、元々は農産物の加工品や手工芸品の生産と販売を行う家屋を指した (Mukminova 1976: 179–185)。リシトンの陶工にとっては、その所有者であるウスタコールが数人のハリファとショーグルトらと共に作業し、製品を売る場所であり、住居と近接していることが多かった。

ウスタコールたちは集まってカサバ (*kasaba*) とよばれる一種の同職組合を形成した。カサバは陶業の利権を守ると同時に、陶工内部の秩序を維持していた (Peshchereva 1959: 375)。カサバの年長者はアクサカル (*oqsoqol*) と呼ばれ、リーダーとしてカサバの活動を取り仕切り、カサバに与えられた大規模な注文をウスタコールに配分してメンバー間の争いを出来るだけ平和裏に解決した。礼儀をわきまえず、アクサカルの言に従わない者やカサバの規則違反に罰金を支払わない者は、カサバから追放された。この場合、カサバのメンバーを招いた宴会を開き、許しを請わない限り、二度とリシトンで陶芸に従事することができなかった (Peshchereva 1959: 353–355)。そして陶器製品の値段も、カサバが原料費や薪の値段を考慮して決めていたという (Peshchereva 1959: 375–376)。このように、リシトンの陶工はカサバに所属し、アクサカルをそのリーダーとしながら、自宅に併設した工房にウスタコールと数人のハリファやショーグルトが集まって陶器を作っていた。それは家内制手工業というべき体

制であった。

ここで、当時の一般的な陶器作りの手順を簡単にまとめておく。まず陶土を採集し、夾雑物を取り除く。好みの可塑性や耐火性に配合して土をねかせる。ねかせた陶土は塊に分けられ、土踏みや手で練る工程を経て、足蹴り式ろくろや手を用いて成形された。半製品の表面を整えた後、化粧土をつけることが多かった。化粧土によってこげ茶色、白色、赤色などを焼成した。表面にはスタンプ模様や刻み目をつけ、物によっては筆を用いて装飾を施した。そして釉をつけて窯で焼いた。一度 900 度前後で化粧土をかけた品を焼いた後、再び彩色し釉をつけて焼く「二度焼き」も行われた。灰釉のイシコールの焼成には 1000 度前後の高温を要した。鉛釉の場合は 850 度程度でよかった。窯焼きの燃料としては乾燥地帯の棘のある低木や、柳の枝葉を主に用いていた (Peshchereva 1959: 213–227; Rakhimov 1961: 31–37)。

3.1.2 陶工の内部構造

当時のリシトンに陶工は何人いたのであろうか。ベシエレヴァによれば、19 世紀末のタヴォクチは 600 人近くいたという (Peshchereva 1959: 349)。この人数にはウスタコールのみならずハリファやショーグルトも含まれていたと考えられる。「1900 年から 1910 年にかけて、リシトンには 130 個の個人所有の工房があり、250 人以下の親方と助手が働いていた」という情報があり (Rakhimov 1961: 24)、また 1915 年から翌年にかけて当地の手工業者を調査したラズヴァドフスキーによれば、「当時リシトンに工房は 80 あって 300 人が働いていた。そこでは親方とその家族、1 人か 2 人の助手がおり、6–7 ヶ月に渡るシーズンには 1500 から 1700 個の製品を生産していた」(Kodzaeva 1998: 4) というからである。一方、クザガルは当時の大都市ブハラでも数軒しかなく (Sukhareva 1962: 129)、リシトンでもタヴォクチほど多くなかったとされている。従って、当時のタヴォクチとクザガルのウスタコールからショーグルトまでの総数は、タヴォクチの約 600 人にクザガル 10 数軒程度を加味して 650 人程度と概算できるだろう。

タヴォクチとクザガルの二集団の中でも、作る製品によってさらに細分化した呼び名が使われることがあった。また、一度焼き製品を他の陶工に売るのを専門にする人々があり、それを買って絵付けをして焼く工程に特化した陶工もいた。絵付けの専門もあり (Peshchereva 1959: 207–208)、陶業が製品や過程ごとに専門分化した様子を読み取ることが出来る。

また、工房の中ではウスタコールとハリファ、ショーグルトの 3 つの階層に分かれ

ていたことは既に述べたが、裕福なウスタコールの中には、自分は働かずに数人のハリファを指揮して生産させる企業家的な者も現れ始めていた。そして、ウスタコールになるための儀礼（後述）を催すことができずに一生をハリファで終わる者や、成形や絵付けではなく陶土の準備だけをして糊口をしのぐ者もいたという（Peshchereva 1959: 346）。

同時代のブハラ職人世界を研究したスーハレヴァは、このようなハリファの増加と、それでもウスタコールへの恩という価値観などによってハリファがほとんど反抗しない様子を「封建制度と資本主義の萌芽の共存」と見なし、批判している（Sukhareva 1962: 177）。しかし、リシトン陶工の間では、ショーグルトからハリファ、そしてウスタコールへの道は技能の向上を通じて基本的にまだ開かれていた。次にその様子を見ていこう。

3.1.3 技能の伝承

通常、弟子として修行中の身であるショーグルトは、技能は一通り身につけたが自分の工房を開くには至っていないハリファの段階を経て、独立した自分の工房を持つウスタコールへと昇進した。その一般的な道順は、次のようであった。

初めに、10代の男の子を親がウスタコールの所へ連れて行き、「この子の骨は私たちの、肉はあなたのもの。私たちは息子をあなたに任せます。あなたは神に任せます」と言って、弟子入りを頼む。「骨は私たちの、肉はあなたのもの」というのは、息子がウスタコールの下で修行中に太ってもやせても、親は文句を言わずにその指導に任せる、という意味である。そして親は食べ物の包みを持参して、ウスタコールに子どもの指導の労を謝するのであった（Peshchereva 1959: 344）。

ショーグルトはウスタコールに絶対的に服従するものとされ、彼の妻にも従わなければならなかった。ウスタコールはショーグルトの服や食事の世話をしやり、出来上がった陶器を与えてやることもあった。ショーグルトはそれを市場で食べ物や現金と換えたのである。このような陶器のことをポシラ（*posira, posra*）と呼んだ（Peshchereva 1959: 345）。ポシラとは、元来、土地の所有者が収穫の一部を耕作者に渡す分を意味したが、後に中央アジア定住地域の職人の間では、ショーグルトが受け取って好きに処分できる製品を指すようになった（Peshchereva 1959: 390–392, Sukhareva 1962: 155）。そしてリシトン陶工の間では、ポシラはアクサカルに渡す謝礼としての食器や、「陶業の守護聖者（*pir*）の子孫（*pirzoda*）」に寄進する食器のことも意味していた。中央アジア定住地域のムスリムの間では、職業ごとに伝説上の人物や実在の

偉人をその職の始祖あるいは職人の保護者として敬い、その子孫に製品の寄進などをする慣習が見られたのだが、リシトン陶工もその例外ではなかったのである。

さて、ショークルトが一通りの技能を身につけ、独立しようとする場合には、アンジュマン (*anjuman*) と呼ばれる昇進儀礼を催さなければならなかった。アンジュマンとは本来、集会という意味の言葉であるが、陶工など一部の職人の間では、ショークルトがハリファに、あるいはハリファがウスタコールに昇進する際の特別な儀礼を意味していた。そこでは、アクサカル、「陶業の守護聖者の子孫」といわれる人々、ウスタコールたち、そして卸売商人をも招いてもてなし、クルアーンのファーティハ⁸⁾を読んでもらう。これは昇進が自他共に認められた証とされた。ハリファはアンジュマンを経なければ、自らの工房を持つことがゆるされなかった。そして、独立しても終生自分の師匠を尊敬し、その家族にも実の子どものように尽くしたという (Peshchereva 1959: 346)。

このように、一人前の陶工になるにはショークルトとして数年間、ウスタコールの下で働き、雑用をこなしながら技能を身につけていくのであった。15-16世紀のブハラとサマルカンドの職人世界を研究したムクミーノヴァによれば、技能を少しずつ時間をかけて教えたがる師匠に対し、当時のショークルトは修行期間の引き延ばしを防ぐために、教えてもらう期間と技能について文書で契約を結んだという (Mukminova 1976: 153-157)。20世紀初頭のリシトン陶工の間にもそのような文書の契約があったどうかは明らかでないが、足蹴り式ろくろを用いての成形や、鉛あるいは灰を用いた釉の精製といった複雑な技能を身につけても、何百人をも饗応するアンジュマンを開くほどの資金を貯めなければウスタコールになれない点で、ウスタコールの数は常に一定数に制限されていたと見られる。

さらに、技能は世襲で伝承されることが多かったようである。クザガルは熟練した技能を要しないためであろう、他家からショークルトを採ることが少なく、ほとんどが息子か親族にのみ教えたという (Peshchereva 1959: 344)。また、チヌヌの製法は、殊に秘密とされた。19世紀半ばに活躍したウスタ・アブドゥッロ (Usta Abdullo, 1825-1912) はチヌヌの名人として名高いが、現在の陶工の間では、彼には息子がいないためその製法を残すことなく去ったとも、あるいは数人の親しい弟子にのみ教えたとも言われている。

3.2 ソ連時代前期および中期（1920年代から1960年代）：

社会主義的生産の整備と葛藤

1917年の2月革命と10月革命後、リシトンを含むフェルガナ盆地においては、バスマチ運動と呼ばれる反ソヴィエト武力闘争が頻発する。当時、リシトン陶工の間ではロシアの工場製の磁器に押されて工場の競争が激化しており、アクサカルもそれらの対立を解決することが出来ずに頻繁に辞職させられていた（Peshchereva 1959: 356）。アクサカルの権威失墜はカサバの政治的、経済的機能の低下につながり、反ソヴィエトと親ソヴィエト勢力が争う中で、陶工の生活にも混乱があったと思われる。

しかし、1924年にはソヴィエト政権が磐石となり、ロシア共産党中央委員会の主導により中央アジアの民族・共和国境界画定が断行された。これにより帝政ロシア時代の行政区分が廃され、現在のカザフスタン、クルグズスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタンの5カ国の国境が決定された（帯谷 2005: 493）。これにより、リシトンはクルグズスタンとの国境沿いでタジク語話者が多く住むという状況ながら、ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国の領土に組み込まれた。翌1925年には土地・水利改革が始まる。それは土地所有の不平等をなくして封建的關係を解消する目的で、地主の土地や家畜、農具を農民に分配するものであった（木村 2005: 383）。そして1929年には農業の全面的集団化へと突き進んでいくこととなる。リシトンの陶工たちも社会主義的生産を行なうアルテリ（artel'）とよばれる組織を作り、個人の工房から協同の作業場へと生産の拠点を移していくことになった。以下ではこの陶業のアルテリを生産組合と記すこととし、この時期の様子を見ていこう。

3.2.1 生産体制

ソ連史においては「集団化」といえば「農業の集団化」を指すほど、その実態について重大な関心が寄せられてきた。しかしそれと比べると、陶業のような手工業の社会主義的生産への改編過程は、あまり注目されてこなかったといえよう。資料もそれほど豊富ではない。そもそも農業の集団化は、所有に関して人々を平等にするという社会主義体制の公的イデオロギーの実現手段であると同時に、生産物の調達を容易にするためという政策実行上の目的もあった（メドヴェージェフ 1995[1994]）。そして集団化によって各地に広がったコルホーズやソフホーズは、地方によっては病院や教育、行政の施設などを備えた一つの地域社会として機能し、体制の公的イデオロギーを人々に浸透させる役割を果たしてきたことが報告されている（高倉 2000；吉田

2004)。

リシトン陶業の改編にも、こうした農業の集団化と共通の理念があったと思われる。すなわち陶業の生産手段の所有に関して差異をなくし、徐々に始まっていた階層分化を阻むと共に、国家による製品調達を容易にするというものである。それはまた、公的イデオロギーに適う社会の建設をも狙ったはずである。ただし、それは農業のように急激には進まなかった。ペシレヴァによれば、当初、生産組合への集中は一部にのみ限られた動きだったという。リシトン陶工による生産組合のうち、最初に出来たのが80人以上の陶工が集まって作られた「ヒムトルド」(khimtrud)である。1918年のこと(Burxonov 1983: 4)とも、1920年代初めであったとも言われる(Rakhimov 1961: 20-21, 24)。これは1925年に「チニガロン」(chinigaron), そして1927年には「ヤンギ・ハヨート」(yangi hayot) すなわち「新生活」に改称される。1940年代にはスターリン名を冠したこともあった(Peshchereva 1959: 209; Rakhimov 1961: 24)。現金に困った者ほど、原料が渡され、製品を現金化してくれるこのような生産組合での製陶に引き付けられていったが、裕福なウスタコールはなかなか参加せず、自ら製品をバザールで売ったり、卸売商人に販売したりしていたという(Peshchereva 1959: 209)。そして今日の陶工の話によると、1937年以降に「家で生産活動を行なってはならない」とされ、個人のろくろや陶土が没収されて生産組合での製陶が強制された。1941年には全陶工が生産組合のメンバーになったという(Peshchereva 1959: 209)。

陶業における社会主義的生産への改編は、このように20年近くをかけて生産の場所を徐々に限定し、国の方針に沿った製品作りの計画から原料の調達、生産管理、流通までを生産組合に集中させるものであった。そして生産組合では製陶がなされるばかりではなかった。例えば「ヤンギ・ハヨート」では、貨物用トラックや運搬のための4頭のロバとロバ車などを所有し、顔料を挽く装置と並んで、穀物を挽くための製粉所も備えていたという。敷地内には靴屋や喫茶場もあった。製粉所で精製した小麦からは、メンバーにナンが焼かれていた(Peshchereva 1959: 209)。ナンという、この地域の人々にとって毎食に欠かせない重要な食物が生産組合から配られたということは、メンバーにとって生産組合が生活の中心になったことを象徴しているように思われる。つまり政権は、陶業においても農業の集団化と同じように生産組合を中心とした一つの生活圏を作り上げ、そこから公的イデオロギーを浸透させようとしたことがうかがえるのである。

しかし、実際には、社会主義的生産の整備を巡って様々な抵抗や葛藤があったこと

が、フィールドワークから見えてきた。例えば、生産組合での定時労働になじまず、以後は陶業から離れてしまった者の存在である。ウスタ・マゾイル (Usta Mazoir) と呼ばれるある名人は、灰釉のイシコールを用いた高度な技法を知っていたが、生産組合に協力することはなかったという。以下は彼に関する、現在の陶工の語りである。

ウスタ・マゾイルはイシコールを使っていた。集団での労働が強制されてから、〈彼のような〉長老の陶工たちは生産組合に行かず、しかし家でも働くことは許されなかった。〈彼らにしてみれば〉9時から6時まで働くやり方は合わなかった。夜にインスピレーションが来ることもあるからだ。そしてその時、すぐ作業すればいいのだ。〈中略〉後に〈生産組合では〉全ての製品を作るようになった。組合長にとってはイシコールが問題になった。そこで、ショークルトたちはウスタ・マゾイルを呼ぼうとした。

組合長が彼を呼んで来て、イシコールの秘密を教えてくださいと迫った。「いいだろう」ということになり、3-4ヶ月が経った。しかし、マゾイルは古いやり方でゆっくり教えるので、若者たちは満足しなかった。彼らが組合長に言うことには「ウスタ・マゾイルは私たちに何も教えていません。いろいろな顔料を自分で準備してしまって、それをどうやって作るのかは見せてくれないのです」。そこで、マゾイルは組合長に簡単な言葉で説明してやった。「私はこの職業を習得するために、人生の12年間を捧げて、まだ少し達成しきれないでいる。これを習うために、私はウスタの牛の世話もした。家を作っていればそれを手伝った。ウスタが子どもを育てる時は私も面倒を見てやった。大変な苦難と共に習ったのだ。それをたった3ヶ月で教えたら、彼らは後に職業に心を込めるようになるだろうか」。

2002年12月17日 N. A.

そして結局、ウスタ・マゾイルは技法を伝えることなく生産組合を去ったという。さらに、当時の陶工たちは互いに一定の距離をおいて技能を隠しあっており、ノルマに沿った陶器を各自が独立に一貫生産して、生産組合に提出していたという。後に見られるような陶工同士の非常に打ち解けた関係も、余りなかったと言われている。

また、基本的に生産組合以外での生産活動は許されなかったが、このような管理をかいぐって自宅で陶器を作り、隠れて売った時期もあったようである。以下はそれを証言する二つのインタビューである。

ソ連の時は〈自宅での生産が〉駄目だった。許可がなかった。9時から6時まで工場仕事をして、疲れてしまって家ではしなかった。〈中略〉でも父たちは、困難だった時代は陶器を作っていたようだ。夜中に働いて半製品に釉を付けておいて、次の日の夜に帰ってきてから火をつけた。窯の前にレンガを重ねておいて、すぐに中に5-6個の碗を置いて、レンガで閉じて焼いた。それでも役人が来て、窯の皿置きを触って、もし熱いと「なぜ熱いんだ」と言って罰金を取った。戦後の頃だった。この目で見たよ。私が幼い時、3日間で100-150個くらい焼いていた。

2003年7月9日 Yu. A.

足蹴り式ろくろは長老の陶工たちの家にあった。夜遅くに行き、自分たちだけでこっそりと働いた。ソ連時代には、隠れて作っていた。家では禁止されていたから。生産組合が出来てからは、皆そこに集められて働いた。でも、家でも隠れて作っていた。私も家でおじいさんから教わった。
2003年5月20日 A.M.

このような様子からは、政権側が意図した社会主義的生産の理念が、必ずしも陶工に浸透していなかった実態が浮かび上がるのである。

3.2.2 陶工の内部構造

生産組合内では、かつてのクザガルとタヴォクチの集団としての区別やライバル関係は薄れていった⁹⁾。さらに、陶工全員が国や組合の物である作業場で働いて月給を得るために、工房の所有に関してウスタコールとハリファの違いもなくなった。これによって以後、ウスタコール、ハリファという語句は使われなくなり、現在使われているウスタ (*usta*) つまり親方あるいは師匠と、ショーグルト (*shogird*) すなわち弟子、という二分法が定着していったと考えられる¹⁰⁾。また、昇進儀礼たるアンジュマンは、次第に開催が減ったと回想されている。生産組合に就職すれば、アンジュマンの開催の是非に関わらず、陶業に従事できるようになったためであろう。

生産組合の運営は、国から出される計画に沿って、国の任命を受けた経営者陣が行った。彼らはラフバル (*rahbar*) すなわち指導者、マネージャーと呼ばれ、高等教育を受けた技術者の中から任命された。彼らはソヴィエト共産党の党員であることが就任の条件であった。以上の、生産組合における内部構造を図に表すならば、図4のようになる。

ペシェレヴァによれば、1948年にはリシトンに4つの生産組合があり、一番大きいのが「ヤング・ハヨート」であった。そこでは83人のウスタがおり、助手たちも

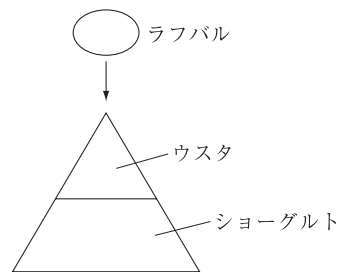


図4 ソ連時代前期と中期におけるリシトン陶業の生産組合の内部構造

いれると総勢 100 人以上が働いていた。その大半はウスタの息子や親戚の子どもであったという (Peshchereva 1959: 209)。これら助手の中で、何人がショーグルトと見なされていたかを示す資料はない。ショーグルトは労働者としては公式に登録されていなかったからである。しかし、次に見ていく工房内の様子は、ショーグルトが、製品を作る上でもウスタを再生産する上でも、不可欠の存在であったことを示している。

3.2.3 技能の伝承

当時、生産組合で行われている陶器作りと技能の伝承の様子は、ソ連時代以前とほとんど変わらなかった。それはウスタとショーグルトの働く工房を核とするものだった。工房は、かつては上述の通り、ウスタコールが数人のハリファとショーグルトらと共に作業し、製品を売る場所であった。それが、ソ連時代においては、生産組合や後に出来た工場の敷地内に設けられたウスタの作業用の部屋を指すようになった。ウスタたちの話と今日の工場の様子からは、1つの建物内を4メートル四方などに区切り、1部屋にウスタが1人とそのショーグルトや助手が数人いるのが標準的な工房であったようである。工房には複数のろくろが備えられ、窯も各工房に1つ程度割り当てられていた。製品の種類と数などのノルマは、工房単位で課せられた。ウスタはそこでショーグルトたちと働き、陶土の精製から窯焼きまで一貫した製造を行ったのである。原料の配合も各自に任されていたという。このような工房を生産の単位とする方式を、「工房システム」(*do'kon tarzi*) といった。

そこでは前章で見たペシェレヴァによる「新しい工房システムの下では、互いに平等な陶工たちが和やかに作業している」という指摘があるが、筆者の聞き取りからは、ウスタの個性によって多少の差はあるものの、ソ連時代を通じてウスタはショーグルトにとって絶対的な存在で、畏れや尊敬の対象であった様子が浮かび上がった。例えば、現在 50 代のウスタは以下のように語った。

私たちが弟子だった頃は、ウスタを見れば逃げたものだった。怖かった。尊敬していた。何か言われないうようにと逃げたものだ。ウスタが仕事を言いつければ、つまりそれをしなければいけないということだ。悪くても良くても、ウスタの言葉はウスタの言葉だ。昼間でも、遅い時間でも、それをしないと。その仕事をして終えてから、工房を出たものだった。

2003年5月21日 A.M.

そして世代差というよりも、ショーグルトがウスタの息子や甥などのウスタゾーダ (*ustazoda*) すなわちウスタの血筋であるか否かで、工房内での立場と居心地が大き

く異なっていたことが指摘できる。例えば、「工場で父親が働いていたので、5、6歳の頃から工場で遊びながら陶芸を習った」という現在60代のウスタは「ウスタの子どもはあまりしかられずに楽に陶芸を習得できたが、他人の子どもはこき使われ、苦労しながら習っていたものだ」と語っている。

他人の子が来れば、働かせて「あれをしろ」「これをしろ」とこき使ったものだ。自分の子には同情してしまうだろう、ウスタゾーダの子には。他人の子は〈働かされて〉困難な中で習得していった。ウスタの子は苦労せずに習得できた。ウスタの子でさぼっていて習得できずに終わってしまった者も多い。〈中略〉他人の子どものヨーグルトを朝も夜もこき使った様子も見つたよ。私の父は夜6時には「作業をやめろ」と言った。「アスル・ナマズ（日没前の礼拝）の後の仕事はイスラームの禁止行為になるぞ」と言った。そして自分が去っても、ヨーグルトには仕事を用意して去った。〈他人弟子である〉Aとかにね。彼らはまだ小さかったよ。

2003年7月9日 Yu. A.

また、各工房では男の子ばかりでなく、妻や娘といった女性を含む親族の助けをも借りて作業するウスタも少なくなかった。

工房では自分の好きな時間で働ける。私は一人の女性のヨーグルトを使っていて、次に息子、そして娘、そして…と徐々に家族でやるようになったんだ。

2003年10月30日 T. A.

ここからわかることは、ソ連の研究者によって「封建的である」と批判されがちであった「絶対的な師匠の権威に従う弟子」という関係や家族的労働が、ソ連時代の生産組合の中にもはっきりと見られたことである。

また、陶器作りの技能も、工房内でウスタからその息子や親族を中心としたヨーグルトへ、世襲に似た受け継がれ方をしていたといえる。ラヒーモフによれば1960年代には3-6ヶ月の陶業の研修コースもあったという（Rakhimov 1961: 21）が、足蹴り式ろくろでの成形などはそのような短期間ではほとんど習得不可能である。ヨーグルトとして幼い頃からウスタと作業を共にした者のみが、このような技法を身につけていったと考えられる。このように工房システムはソ連体制下にもありながらも、ソ連以前の陶業の特徴を多分に残すものであった。

その一方で、この時代に失われていった技法もある。チンヌとそれを覆った釉イシコールがその代表的なものである。今日のウスタたちの話を照合した限りでは、イシコールの原料となる草が生える土地が耕地化されて原料が手に入りにくくなったことや、複雑な製法が生産ラインに乗りにくかったこと、先に見たようにイシコールの製法を知る年長ウスタが協力しなかったことなどがそれらの消滅の原因のようである。

しかし、それでもチンヌやイシコールの話は、工房の中でウスタからショーグルトへと語り継がれていた点が重要である。後にそれが、イシコールの復活へとつながるからである。

3.3 ソ連時代後期（1970年代から1991年）：機械化と安定の享受

大祖国戦争とも呼ばれた第2次世界大戦が終結し、ソ連体制が安定と発展へと向かった時、リシトン陶業においては機械化が始まった。まず、1960年にリシトンの陶業の生産組合や生活サービスセンターなどが統合され、「ヤンギ・ハヨート」は「クイビシェフ珪土・陶芸製品第一工場」(Kuibyshevskii silikatno-keramicheskii zavod No. 1)の一部となった(Rakhimov 1961: 21, 24)。そして徐々に土練機や電動ろくろ、鋳型の導入といった機械化が進められていった。薪やガソリンを燃料としていた窯が、ガス窯になったことも大きな変化であった。

1972年には、このような機械化の成果を集めた新しい工場の建物が完成した。そして「リシトン芸術陶芸製品工場」(*Rishton badiiy kulolchilik buyumlari zavodi*)略してリシトン陶芸工場 (*Rishton kulolchilik zavodi*)として出発する(Burxonov 1983: 6)。10ヘクタールの敷地には、従来のウスタごとの工房群の他に、コンベアー・システムを導入した建物も作られた。また、製品のための見本も導入され、均一な製品の大量生産を促進した。本節では、このリシトン陶芸工場の開設からの変化を扱う。

3.3.1 生産体制

リシトン陶芸工場は、ソ連時代後期には図5のような体制をとっていた。これは元幹部が提供してくれた図であるが、このうち「イジョーディー・グループ」(*ijodiy guruh*)すなわち「創造的集団」はベレストロイカ期に設けられたものであり、詳しくは後述する。図5からは、工場が陶器生産を担当する部局のみならず、土練機などの機械の整備、釉や原料の研究、質の管理、販売担当など多くの部局からなっていたことがわかる。

陶器生産はこの図の「生産および工房部」の下、二つの生産ラインに分かれて行われていた。ひとつはこれまで見てきたような工房群であり、もう一つはベルト・コンベアー部である。工房では数十人のウスタたちが特別注文の、装飾的な陶器を主に作っていた。コンベアー部では、労働者たちがそれよりも簡単な装飾で安価な日用食器を作っていた。ウスタの中には、コンベアー部で労働者の作業班を指導する者もいた。どちらの生産ラインにも、見本によってそれまで以上に製品の質の管理が徹底さ

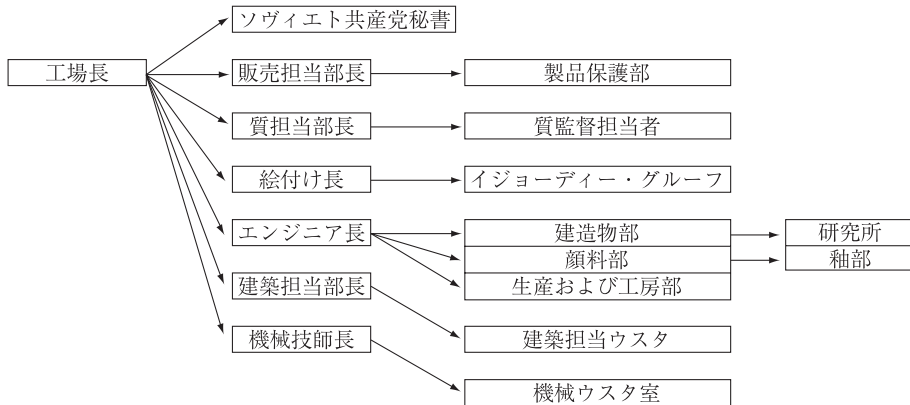


図5 ソ連時代後期のリシトン陶芸工場の組織図

れるようになったことが、この時代の特徴である。

1972年の新工場開設の頃から、見本によって製品の形、陶土の配合、顔料や釉の成分、模様など全てが指定されるようになった。これは「壺をいくつ、平皿を何枚」などと各工房にノルマを割り当てつつも、製品の細部はウスタの裁量に多くを負っていたこれまでの方式を改め、中央の認証を得た均質な規格品を作り出す方式であった。コンペアー部で生産される日用品のみならず、工房で作られた装飾的な陶器をも正確に規定し、質を一定に保つという点で重要な「改革」であった。

しかし、見本の認証方法はリシトン独自の様式を重んじるウスタたちの大きな不満を呼んだ。あるウスタは以下のように、リシトンの古い文様に関する知識や創意が生かされなかった点が当時の不満の理由だと語った。

工場ではウスタたちが一箇所で働いたのはよかった点といえる。悪い点はウスタの自由を排除したこと。新製品の生産のために国の監督まであった。2000人中2-3人の絵描きが作った見本を〈タシケントの〉芸術委員会の承認をもらいに持っていかないとだめだった。ウズベキスタンの伝統にかなったものはほとんど通らなかった。話によれば、その委員会のメンバーの中にはロシア人、白ロシア人がいて、〈リシトンのウスタが作った見本を〉直したという。共和国の地元産業局指定の絵描きも我々に見本を作った。それは全く自分たちの伝統陶芸にふさわしいものではなかった。我々のものは認証をほとんど得ることが出来なかった。10個中2個くらいしか通らなかった。 2003年10月27日 N.A.

このような状況を、近年のウズベキスタン科学アカデミーの研究者たちは、「ウズベキスタンの伝統的陶芸の存続が脅かされた」(Alieva and Khakimov 1999: 16) 時期として否定的に評価している。

しかしこの時代は、ウスタたちにとって製品の管理の強化という点では不満があっ

たにせよ、生活の面からは非常に満足のいくものだったとも回想されている。特に機械化を経た1970年代末からは職が安定しており、物価も安く、「暮らしに何も問題はなかった」と語られている。彼らたちは安定した収入の下、互いにヨーグルトを融通したり、毎週のように共食に繰り出したりして、かつてのようなライバルというよりも、工場の同僚としての連帯を強めたという。

彼らの間ではポシラと呼ばれる習慣さえ行われていた。これは前述の通り、ソ連時代以前には、ヨーグルトやアクサカルなどが受け取る食器を指していた。だがこの時代は、出来上がった製品のうち、国に渡さずに自分の物にする分を指した。これは「盗み」であると認識されつつも、広く行なわれていたという。そして1980年代の電気窯の導入は、製品の生産者と量を正確に把握して焼くことを可能にしたが、これはポシラのような慣行をなくす狙いもあったと、一部のウスタには認識されている。

また、ウスタたちは機械化や技術革新の恩恵にも浴していた。足蹴り式ろくろが電動式になり、鋳型が導入されたことで、足でろくろを回しつつ手で成形する困難さが解消されたのである。このため1970年代に訓練を受けた陶工の多くは、今日でも手での成形が出来ない。ただし年長のウスタは足蹴り式ろくろになじんでおり、その技は息子などに細々と伝えられていた。焼成に関しては、ガス窯や電気窯になったことで、手間が大幅に省けた。さらに顔料や釉の研究部門が出来、専門家が配合するようになったことで、それらを自分で調整する必要もなくなった。

ベレストロイカ期には、生産体制に新しい動きが見られた。ゴルバチョフの改革の気風に乗って、リシトン陶芸工場でも見本のもたらず停滞を打破しようとする動きが起こったのである。それが、20人あるいはヨーグルトも入れて60人程度の腕の良い陶工たちから成るイジョーディー・グループを結成し、そこで自由な陶芸を行うという試みであった。その製品は少量ずつ高級品として特別な販路で売られ、利益はそれを作ったウスタ本人にも返ってくる仕組みであった。これは1988年に始まり、経済的にも、ウスタの創作意欲を刺激する上でも、大成功を収めた。

同時に、コンペアー部での生産用見本に関しても、リシトン陶芸工場のメンバーで構成される工場の芸術委員会に決定権が与えられるようになった。タシケントまで試作品を持参し、承認や修正を受ける必要がなくなったのである。これによって古い絵柄や形を知るウスタたちの意見がよく反映された、いわゆる「伝統的なリシトン陶器」が多数製作されるようになった。そして、有望な若手ウスタたちは、モスクワやレニングラード（現サンクトペテルスブルグ）の博物館などに所蔵されていた19世紀から20世紀初頭にかけてのリシトンの作品を見にいき、製作の参考にした。こう

して1980年代末からのリシトン陶業は、年長ウスタの指導の下で若手のウスタが腕を競い合う活況を呈した。

3.3.2 陶工の内部構造

リシトン陶芸工場に設けられたコンベアー部は、陶業の一過程のみに特化した労働者を大量に生み出すことになった。特に、土練りのような力作業を要求されない絵付けの専門職が出来たことで、女性の労働者が急増した（表2参照）。以下のインタビューは、この作業の細分化と女性労働者の登場という点が、当時新しかったことを裏付けるものである。

昔は絵付けのみ、成形のみ、というのではなかった。茶碗を陶土から焼くまで自分でしたものだ。作業班でも最初から最後までした。のち作業班ごとに陶土精製、成型、絵付け、窯焼きを分業するようになった。1972年ごろまでにそうなった。機械化、発展は1973、74年だった。トンネル式の電気窯とかいろいろなものが導入された。それまでは全てのプロセスのできる人が働き、残りはショーグルトだった。会計係などを除いて女性は1970年ごろから入って働くようになった。 2003年10月23日 B.G.

今日のウスタへのインタビューでは、このような女性労働者を含むコンベアー部で働いた人々はイシチ (*ishchi*) すなわち「労働者」と呼ばれている。これは工房で働いた人々がウスタとショーグルトと呼ばれているのに対して、対照的である。では、イシチとウスタ、ショーグルトの違いは何とされているのだろうか。

イシチはリシトン陶芸工場の敷地内の「生産学習センター」(*O'quv-ishlab chiqarish kombinati*)で研修を受けていた。そこでは陶業の基本や安全性についてのみならず政治学なども教えられ、半年から8ヶ月の研修の後、コンベアー部の鋳型による成形部

表2 リシトン陶芸工場の労働者数
(Burxonov 1983; Rakhimov 1961; Raximov 1974 とインタビューより筆者作成)

1960年代	複数の生産組合を集めたリシトン陶芸工場が300人規模で発足
1972年	新工場の建物完成
1974年	工場の労働者418人のうち、135人が女性
1983年	リシトン市の工場と近隣2支部で1500人以上の労働者 そのうち700人以上は若い女性
1980年代半ば から1991年	リシトン市の工場で2150人程度の労働者 (最盛期に手伝う家族を数えると3000人程度になる) 工房システムで働く特別なウスタたちは50-60人

門や絵付け部門で働くこととなった。この研修体制は、イシチが飽和状態になった1980年代末まで続いた。

しかし、ウスタたちの認識では、イシチに留まらずにウスタになるためには、ショーグルトとして幼い頃から工房に通うことが絶対に必要であった。ショーグルトとしての経験の上に生産学習センターでの知識を加えることはあっても、生産学習センターでの研修だけではウスタにはなれないとされていたのである。また、イシチの多くは女性であり、女性のウスタが皆無に近いという、当時から現在にまで続く状況から考えてみても、イシチの存在はショーグルトからウスタへと続くコースとは全く別物として捉えられていたことがわかる。以下は15年近く生産学習センターで講師を務めたウスタの話である。

我々は〈工場労働者約2500人のうち〉1500人を教え込んだ。残りの1000人は実習だけさせた。〈彼らはある程度陶芸を知っていたので〉もう一度経験を積ませたのだ。8ヶ月コースで40-60人に教えた。後に6ヶ月コースになった。たとえ40人が入っても結婚退職する娘もいて、常に働く人は20人程度のみ残った。娘たちが多めで、彼女らは絵付けをした。父親などが陶工で〈自らも〉働いている子は6時間勉強し、それから父親と働いた。講義では色の名前や成分、方法を習った。〈中略〉

ただ、特別なウスタたちは別に班や工房があり、注文をとって独自の仕事をしていた。顔料も自分たちで作っていた。そういうウスタが50-60人くらいいた。手で作る人、良く描ける人、型作りたちなどだ。
2003年11月15日 A.K.

この状態を図に表したのが図6である。イシチはコンペアー部での部分的な作業に従事するのみで、ウスタに上昇することがなかった点に注意されたい。

陶器作りの現場において、作業班長のウスタや特に腕の良い者は、「大ウスタ」(*katta usta*) などと呼ばれて人々の尊敬を集めていたが、ウスタがラフバルと呼ばれる経営陣に抜擢されることはほとんどなかった。経営陣就任の条件は、高等教育を受け、ソヴィエト共産党員であることだったが、ウスタの多くはショーグルトとして幼

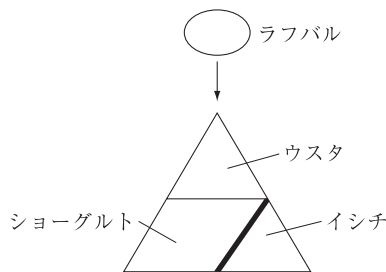


図6 ソ連時代後期におけるリシトン陶芸工場の内部構造

い頃から訓練し、義務教育終了後すぐに工場に就職していたからである。1973年以降の4代に渡る工場長はリシトン周辺の出身者だったが、彼らは陶業ではなく、経済などの専門家であった。

しかし、ペレストロイカ期に設立されたイジョーディー・グループには、1989年にその長たる絵付け長に、高等教育を受けていないショーグルト上がりの者が初めて選ばれた。これはウスタの中からラフバルが選ばれたということで、改革の時代を感じさせる画期的な出来事であった。

3.3.3 技能の伝承

工場の原則として、児童労働は違法であった。また、土練機など大型機械が設置された工場内には、安全上の理由で子どもの立ち入りは禁じられていた。しかし、これまで見てきたように、ウスタたちにとって、子どもの頃からショーグルトとして作業する過程は、腕の良いウスタになるための正統で必要不可欠の過程と考えられてきた。それはイシチがコンベア一部で働くために受ける約半年間の研修とは、構造的、機能的に全く異なるものと捉えられていたのである。まれに、タシケントやフェルガナといった大都市の専門学校で陶芸の技法を習ってきた者もいたが、彼らは少数派であった。工場で働くウスタのほとんどはショーグルト時代を経験して技法を身につけていたのである。そのため、公的には禁止であるにも関わらず、ショーグルトたちは工房へと忍び込み、ウスタを手伝って技能を磨いていた。ここで、工場内の工房においてショーグルトがいかに陶芸を学んでいったかを、インタビューを元に整理してみよう。

ショーグルトの多くは10代の頃に弟子入りした。その際に、親は教授代を払わず、折に触れて食べ物などの包みを贈るくらいだった。ウスタは常に弟子を採るとは限らず、ショーグルトの世話をする余裕がない時は断り、他のウスタを紹介した。弟子入りすると、学校が終わった後で毎日通い、初めは作業をひたすら片隅から見るのであった。1週間から1ヶ月ほどで「目が熟す (*ko'z pishmoq*)」つまり一通り全工程を見慣れると、簡単な作業に参加が許される。下書きされた柄の小さな枠内に色を付けていく作業が最初とされる。新入りに筆さばきなどを直接教えるのは、彼より以前に弟子入りした兄弟子であった。昼または夜の食事は工房で、全員でとった。このようにして研鑽を積み、9年間の義務教育あるいは11年制の学校を卒業するまでには一通りの基礎を身につけ、卒業後は工場に就職した。そして兵役を経てまた工場に戻り、結婚までには一人前のウスタになったという。

ショーグルトは製陶作業ばかりでなく、工房の清掃、客が来た場合のお茶くみ、中庭への水まきからウスタの牛の世話まで様々な雑用を命じられた。特にウスタや兄弟子に対する丁寧な言葉使いや工房を訪れる客に対する礼儀作法は厳しく教え込まれた。親の中にはこのようなしつけの効果を期待して、子どもの弟子入りを希望する者も多かったといわれる。

ソ連時代前期と比べて特徴的なのは、この時期のショーグルトは、特定のウスタに縛られずにいろいろなウスタの所へ比較的自由に出入りし、学べる環境にあった点である。イシコールなど特定の技法を除いては、創作現場を隠そうとするウスタは少なかったという。製品の均一化と安定した生活が保障された環境によるものであろう。そしてショーグルトも「工場のショーグルトはウスタ全員にとってのショーグルト」と自覚していろいろなウスタを手伝っていたという。

1970年代末には、工房で父やおじたちから往年のイシコールの話を聞いて育ったウスタ、カミロフ・イブラギム氏（Komilov Ibragim, 1928–2003）が、独自に研究を進めてイシコールの製法を復活させ、1980年代には生産ラインに乗せた（Burxonov 1983: 15–19）。この復活劇は連邦内で高く評価され、氏は勲章を授与されたが、そのイシコール探求を支えたのもショーグルトとして工房の中で積んできた経験だったのである。そしてカミロフ氏は有望な若手の弟子にイシコールの製法を伝え、イジョーディー・グルーフの活動の際には、他の長老ウスタたちと共に、古くから伝わる文様の若手への伝授にも努めた。

ところで、工房で伝えられたのは技能ばかりではなかった。ウスタはショーグルトと共に工房で長時間を過ごしつつ、以下のような陶工に伝わる様々な儀礼を実践して受け継がせ、「陶業の守護聖者」とされるアミル・クロール（Amir Kulol, ?–1371）やバハウッディン・ナクシュバンド（Bahā'al-Dīn Naqshband, 1318–1389）に関する伝説や儀礼をも伝えていた。ナクシュバンドは著名なスーフィー（いわゆるイスラーム神秘主義者）で、中央アジアからバルカン半島や東アジアにまで広がるナクシュバンディー教団の名祖である。アミル・クロールはその師匠の一人とされる。フェルガナ盆地やサマルカンド、ブハラなどでは、アミル・クロールは陶工であり、ナクシュバンドも彼に師事して陶業に従事したため、「陶業の守護聖者」であるといわれる。そして彼らの廟への巡礼や、その子孫とされる人々への陶器の寄進は陶工としての義務だという。

このような観念は、宗教を誤ったイデオロギーとみなし、反イスラーム・キャンペーンを繰り返してきたソヴィエト政権の公的イデオロギーに明らかに反するもので

ある。しかし、インタビューからは、リシトン陶芸工場のウスタたちがさまざまな慣習や「陶業の守護聖者」に関する知識と実践をソ連時代もショークルトに伝えていたことが明らかとなった。

工場でも慣習 (*urf-odat*) は、それほど失われなかった。毎月 1-2 回または 2 ヶ月に 1 度くらい揚げパンを作った。それを工場へ持って行って、クルアーンを詠んで、亡くなった人々の魂 (*ruh*) や守護聖者に捧げた。 2004 年 11 月 2 日 G. K.

我々の一番偉大なウスタたちは言ったものだ。「我々の守護聖者はバハウッディンだ。アミル・クロールはバハウッディンのウスタで、窯に火を入れている時にバハウッディンを置いて礼拝に行った。その間に薪が尽きてしまった。バハウッディンは「火を絶やすな」というウスタの言葉を守るために、自分の足を燃料にして焼いた。後でウスタが帰ってきて、バハウッディンが足を引き抜いたところ何ともなかった」と。このように昔のウスタは我々に言ったものだ、全ての職業に守護聖者があると。 2003 年 10 月 30 日 T. A.

そこ〈ブハラのパハウッディン・ナクシュバンド廟〉にはご自身の墓や、その母上様の墓もある。〈ナクシュバンドと同じく陶工たちの守護聖者である〉アミル・クロールの墓もある。つい最近まで、我々は毎年 1 度ウスタたちで、その頃ソ連邦内は山の道も自由に通れたから、タジキスタンを通って行ったものだ。〈質問：そういう巡礼は許されていたのか?〉そう。でも、廟は修理されておらず、状態は悪かった。今は修理もされてきれいだ。人もたくさんいる。 2003 年 3 月 15 日 N. A.

このように巡礼や儀礼が可能であった理由は、「工場の経営陣にはロシア人が少なかったから」と説明されている。経営陣がリシトン出身者あるいはムスリムであれば、「陶業の守護聖者」への尊敬の念を理解し、咎めなかったというのである。

さて、1991 年に起こったソ連邦の解体は、多くの陶工にとって突然の出来事であった。そしてウズベキスタンの独立と市場経済化により、彼らは本格的な自由化と競争の時代に入っていくこととなった。しかし、それらの動きは、社会主義体制に焦点を当てた本稿とは別の場所で論じることとし、次章ではソ連時代の変化や近代化についての考察に移ることとしよう¹¹⁾。

4 考察

4.1 ソ連時代の変化

ここでは前章で見てきたソ連時代のリシトン陶業の変遷を簡単にまとめたい。まず、生産体制の面から見てみよう。リシトンにおいて、20 世紀初頭の陶業は、ウスタコールがハリファヤショークルトらと共に、住居に近接した工房で作業する家内制

手工業の形をとっていた。ウスタコールたちはカサバを形成し、カサバが薪の値段を決め、製品の質や量を管理し、仕事の配分なども行った。陶工はクザガルとタヴォクチの二集団に大別され、さらにその内部で専門分化が見られた。クザガルは世襲が多かったが、タヴォクチの間では自らは作業をせずにハリファたちを働かせるのみのウスタコールが出現し、階層分化が始まっていた。

そこに誕生したソヴィエト政権は、1920年代から1941年にかけて生産体制の大改編を行った。それによって、リシトン陶業は工場制手工業へと転換した。そして、中世ギルド的なカサバによる陶業の管理は、国家が原料配布から流通までを支配する計画経済という中央集権的な統制に代わった。陶工の内部構造もそれに合わせて変化した。ウスタコール、ハリファ、ショーグルトという3者関係が、ウスタとショーグルトという2者関係に変わったのである。ウスタは生産組合や工場の中に割り当てられた工房で原料を受け取り、国の計画に沿ったノルマを果たし、賃金を得た。ショーグルトはウスタの作業にとって不可欠の補助的労働力を提供していたが、ソ連体制においては正式な労働者に換算されなかった。このように生産の場が統合され、国家や組合の管理と計画の下で製陶する体制は、ソ連時代を通じて基本的に揺らがなかった。つまり、生産体制の面では、ソ連時代初期に原型がほぼ確立したといえる。

一方、陶器作りの現場では昔ながらの技法が軸となって続いていた。それが大幅に変わったのは、1972年のリシトン陶芸工場の設立前後である。この時期に電動ろくろ、土練機、鋳型などが導入されて機械化が進み、コンペアー部が設立されて細分化された労働が始まった。そして見本に基づいた生産により、同質の製品の大量生産が可能になった。工場内には顔料や釉、陶土の配合などを研究する部局も作られて、品質の改善と均一化を促進した。

だが、このようなソ連時代の変化を経ても、リシトンでは現在でも手での成形や古い文様の使用といった、ソ連時代以前の技能との連続性が比較的強く見られる。これはウズベキスタンの他の窯元、例えばキトブやシャフリサブスなどではそれらの技能が失われ、ウルグトやギジドゥワンでは陶芸を受け継ぐ家族が数軒に過ぎなくなったことに比べて、顕著な特徴である。そしてその理由の重要な一端は、工房システムにあると考えられる。次にこの工房システムの意義を検討しておこう。

工房システムとは、ウスタとショーグルトが作業する工房群が、生産組合や工場の敷地内にコンペアー部とは別に確保され、ノルマさえ果たせば工房での活動や就業時間は比較的ウスタの自由裁量に任されていたものである。そこでは、ショーグルトが幼い頃から正規の就業時間以外にも出入りして雑用をこなしながら様々な技能を学

び、リシトン陶工としての誇りを育んできた。このなかで、ウスタからショーグルトへ、手での成形方法や数々の文様とその意味などが受け継がれてきた。1970年代にイシコールの技法を復活させたウスタも、工房で年長のウスタたちから聞いた昔の陶工の話に興味を持ったことが古い技法の探求へ進むきっかけになったという。そしてペレストロイカ期に結成されたイジョーディー・グループは、長老のウスタから古い文様やスタイルを教わり、それを取り入れた製品を積極的に作っていくことで成功を取めたのである。

また、工房では陶業の守護聖者に関する伝説や儀礼なども受け継がれてきた。それらは宗教やイスラーム的慣習に対して否定的であったソヴィエト体制の公的イデオロギーから逸脱するものであったが、幼い頃からショーグルトとして工房の環境で育ったウスタたちは、それを否定することはなかった。そして工房ではウスタへの生涯を通じた尊敬の念や、礼儀作法なども教え込まれていた。従って、工房システムはリシトン陶業における古い技能や慣習を維持するために、大きな役割を果たしたと考えられるのである。

工房はまた、熟練したウスタを多く再生産するために必要不可欠な場であった点も見逃せない。そこでのショーグルトの働きは、児童労働を禁じる工場において表向きは認められていなかった。しかし実際には、工場で働くウスタの大部分は、専門学校での学習ではなく工房でのショーグルト経験を経て熟練していた。すなわち工房システムは、そこでショーグルトの労働と研鑽が行われて優れたウスタを多数生み出すという点で、工場の円滑な運営に欠かせない役割を果たしていたと捉えられるのである。このようなインフォーマルな工房での活動とフォーマルな制度の関係は、相互補完的であったとすらいえよう。

ただし、ソ連時代前期にはほとんど見られなかったウスタ間でのショーグルトの融通が、ソ連時代後期には頻繁になり、ウスタ間の親睦も深まったとされている。そこからは、工房でのウスタ間やウスタとショーグルト間の関係が、完全に前世紀のままであったわけではないことがわかる。ウスタとショーグルトの結びつきは、徐々に特定の個人間から工場全体のウスタたちとショーグルトたちの連帯へと広がったと考えられる。

4.2 近代化という尺度から

次に本節では、上述のようなりシトン陶業の変化を、近代化の観点から考察してみよう。まず、「技術の近代化」に関しては、本稿の事例では、あくまで生産に関する

技術に限って話を進めることとする。それも、ブルハーノフが誇ったような統計レベルでの生産量の向上といったことではなく、マイクロ・レベルの陶器作りの現場における「技術の近代化」が焦点である。

すると、ソ連時代の前期および中期は陶器の作り方にあまり変化がなく、陶工ごとにこれまで培った技能を活かして、割り当てられた陶器の種類と数量を、分業ではなく一貫して作っていたことがわかる。特にソ連時代初期には、同じ生産組合の陶工同士でも、互いに技能を隠しあう状況すらあったという。これでは、均一な製品を大量に生産することは期待できなかったといえよう。

状況が目覚しく変化したのは、本稿で第3期に区分した1970年代頃からである。この頃、それまでの足蹴り式ろくろを使っての手での陶器の成形は、電動ろくろと型を用いた成形へと変わった。土練り機やガス窯の導入も進み、釉や顔料は専門化が配合して陶工に配るようになった。そして分業制のコンベアー部も出来た。このような技術の変化に加えて、見本に沿った製品作りも促進されるようになった。これらによって、均質な製品を大量に生産することが可能になったのである。それはラヒーモフやジャドヴァのような研究者に「製品の質の低下」と指摘されることもあったが、陶器作りの効率向上や生産量の増加という点からは、まさに「技術の近代化」といえよう。そのうち電動ろくろと型を使っての成型や、ガス窯での焼成方法は、現在に至るまでリシトン陶業の主流となっている。

しかし一部では、このような近代化の特徴にそぐわない製品も作られ続けた。それはコンベアー部ではなく、工房で作られた少量の装飾的な陶器類である。そこでは電動ろくろも普及したが、足蹴り式ろくろを用いた手での成形も細々と続けられ、1980年代には天然の灰釉であるイシコールの技法が復活されていた。そしてソ連時代末期にイジョーディー・グループが創設された際には、そのメンバーはコンベアー部のように見本に沿った日用品を大量に作るのではなく、リシトンに伝わる古い文様を活かした少量の高級品を、誰がそれを作ったかを明確にしつつ生産することを目指したのである。

つまりソ連時代におけるリシトン陶業の「技術の近代化」は、1970年代頃によく本格化し、電動ろくろや型、ガス窯導入などが浸透した。しかし、大量に均一な製品を分業で作る方式は、専らコンベアー部で働くイシチと呼ばれる人々のものであって、その監督をしたり、工房部で働いたウスタにはあまり受け入れられなかったといえる。ウスタたちは、生産にとって便利な技術革新は受け入れても、土から陶器を作り出すという一連の技能を分業と引き換えに手放そうとはしなかったのである。

次に、「組織の近代化」については、第1章2節で見たとおり、組織の経営がより科学的合理性に基づいたものへ変化したという側面と、組織内の人間関係の近代化という側面が考えられるのであった。このうち、前者は生産組合が整備され、その規模が拡大していくにつれて進んだといえそうである。生産組合や工場は、政府の方針に従った計画によって運営され、品質管理や顔料、釉の研究部門も作られていた。ソ連全体に蔓延した官僚制の弊害など様々な不備があったにせよ、それは以前の家族単位の生産よりも遥かに高度な経済学的計算や組織運営上の技術を伴い、近代的経営方式を陶工やその家族たちに知らしめたはずである。生産体制の改編の初期に、その定時制労働や技能を短時間で他の陶工に伝える姿勢に反発したあるウスタは、生産組合を去るほかなかったのである。

そして組織内の人間関係が、平等な権利を持つ個人が意志と契約に基づいて交わすものを中心としていく、という意味での「組織の近代化」も、1920年代から始まった生産体制の社会主義的改編から進んでいったと見られる。具体的には、まず生産手段の所有に関して陶工間に区別がなくなり、ハリファという段階がなくなって基本的に皆同じ組合や工場の成員になった。これによって徐々に陶工間関係の平等化が進んだと考えられる。パシレヴァが1950年前後の「若者たちで構成された工房の雰囲気」として指摘した自由で開放的な様子は、この点を付いたものではないだろうか。そして初期には互いに技能を隠しあっていたといわれるウスタたちが、ソ連時代後期になると親睦を深め、食事に繰り出し、シヨーグルトを融通しあったことが報告されているのである。

ただし、より優れた技能を持つウスタや作業班長のウスタへは、工場の中でも特別な敬意が払われたという。また、ウスタコールとハリファのような一種の階層差はなくなったものの、ウスタとシヨーグルト間の厳格な差は続いていた。シヨーグルトはウスタに対して、特に自分の親族でないウスタの場合は、尊敬と恐れの念を持っていたのである。そしてこのようなウスタとシヨーグルトの徒弟制的な関係は、「組織の近代化」には逆行する特徴といえなくもない。それは作業場限りの契約関係ではなく、一生続く師弟関係でもあったためである。ソ連時代後期に作られた「生産学習センター」での研修体制は、これを排除することができなかった。工房で作られる装飾的な陶器の製作には、センターでの半年程度の研修では習得不可能な複雑な技能を要し、それが習得される場は工房内にしかなかったのである。その工房では、技能のみならず「陶業の守護聖者」に関する知識や礼儀作法も教えられ、シヨーグルトに陶工としての誇りや規範を伝えていた。

すなわち、生産組合や工場は、製陶をするために陶工が集合した「生産のための組織」と見なせるばかりではなく、陶業を通じてウスタとショーグルトが生涯にわたる師弟関係を結び、陶工としての誇りや礼儀作法、反宗教的な体制のイデオロギーに反するような慣習さえも伝えていく「慣習の再生産の場」という側面ももっていたことがわかる。それは陶工を、生産手段の所有に関して差異をなくして集団的に生産させることで、ソヴィエト的な新たな生活圏を創造しようとした政権の意図からは、逸脱した側面だったといえるだろう。生産組合は「ヤンギ・ハヨート」すなわち「新生活」という名すら冠していたのであったが、その内部では全てが根本的に新しくなったわけではなかったのである。また、ポシラと呼ばれた製品の着服の習慣や、家で隠れて陶器生産を行なったことなどからも、ソ連の社会主義建設の理念が、必ずしも陶工間に浸透していなかったことが明らかとなる。

こうして見てくると、「人間の近代化」もすんなりと当てはまる状況ではないことが明白になってくる。ここでもう一度第1章2節での定義に戻っておくと、「人間の近代化」とは、個人としての主体性の確立や、識字力や科学的知識の取得に基づいた、非宗教的で科学的合理性に即した志向の拡大を指すのであった。確かにウズベキスタン全体において、識字力や科学的知識の取得はソ連時代に大幅に進んだとされている。しかし、本稿で取り上げたりシトン陶工の事例では、工房でのウスタとショーグルトの関係を中心に、「陶業の守護聖者」への儀礼や巡礼の実践などもソ連時代を通じて行なわれており、非宗教的な志向が貫徹したとは思われない。この点ではベシエレヴァの単線進化論的な世俗化の見通しは当たっていないだろう。

もっとも、「人間の近代化」に関しては、本稿の資料で述べられることは極めて限られているのも事実である。これは、ソ連崩壊以後の状況や、この地域のイスラーム信仰実践全般に関わるデータをもって改めて論じられるべき課題であろう。そしてその際には、「人間の近代化」という大きな目盛りではなく、より細かく柔軟性のある尺度をもって、見ていくべきかもしれない。

いずれにせよ、ソ連時代に起きたリシトン陶業における近代化は、ある面では「進んだ」といえるものの、すぐに「別な面ではそうとはいえない部分があった」と留保をつけなければならない、非常に複雑な現象であったというべきである。

4.3 結びに代えて

本稿は、ウズベキスタンのリシトン陶業が、ソ連時代にどのような変容を遂げたかをミクロ・レベルに注目しながら検討してきた。そして幾つかの興味深い特徴を明ら

かにすることができた。それは、社会主義の建設という理念の下に陶業の生産組織も強制を伴って改編されたが、その動きは農業の集団化ほど急激ではなく、生産組合の下でも個々の陶工が従来の技法を用いて独立に陶器生産をしていたこと。そして、社会主義的な生産の形も、決してそれのみで自足していたわけではなく、熟練したウスタの再生産などの点で、工房内のウスタとショーグルトの伝統的な徒弟関係に支えられていたことなどが挙げられる。また、政権の掲げる公的イデオロギーが、組織や技術の改編によっても個々の陶工にはなかなか浸透せず、逆に生活が保障されたソ連の工場において、ポシラという古い慣習の名で製品の着服が行なわれ、「陶業の守護聖者」への尊敬の念が伝えられてきたことも、興味深い皮肉である。

この他、第3章では、ソ連時代初期に定時労働を嫌って生産組合への参加を拒否し、請われても特定の技術を教授しなかったウスタがいたことや、当初は互いの技を隠しあっていたウスタたちがソ連時代後期にはショーグルトを融通しあうまでになったことなど、従来の研究ではほとんど明らかでなかったような陶工の実体を僅かながらも示すことができた。ソ連時代を普通の人々がどう生きたかを知るためには、このような細部を掘り起こしていく人類学的フィールドワークがやはり有効であると考えられる由縁である。人々にとってソ連時代、社会主義時代は何だったのか、どのような近代だったといえるのか、そしてこれからその経験がどう生かされていくのかを捉えるためには、さらに地道な人類学的フィールドワークを積み重ねていく作業が不可欠であろう。

次に、本稿ではこのような変化が近代化という枠組みからはどの程度評価できるものかを考察した。それを簡単にまとめるならば、まず、組織の面でソ連時代初期に強制的な改編がなされ「組織の近代化」の特徴が見られたが、しばらくは既存の技術をもつての製陶が続いていた。そして1970年代頃から、「技術の近代化」といえる様々な技術革新によって均一な製品の大量生産が可能になり、分業制のベルト・コンベアー部も作られた。しかし、1980年代末には、少量の高級製品の生産が成功してウスタたちの関心をひいた。ウスタたちは自らを、分業で日用品を大量生産するイシチと同一視することはなく、工房で陶器の一貫生産の技能をショーグルトに伝えていた。このようなウスタとショーグルトの徒弟制的な関係は、「組織の近代化」の枠組みにはあてはまらないものであった。そして工房では「陶業の守護聖者」に関する儀礼なども伝えられており、そこでの「人間の近代化」に関しても、今の時点では、科学的合理性に基づいた志向の拡大という側面が大幅に進んだと断定することは難しい。このように、ソ連時代のリシトン陶業の近代化は、単線的に進展したわけではな

く、非常に複雑で多くの留保を含んだものといえる。

このように本稿では、ソ連時代の複雑な変容を単に列挙するばかりでなく、あえて近代化という枠組みに照らし合わせてみた。それは、これから更に進むであろうポスト社会主義圏に関する人類学的研究において、それが社会主義体制の特殊性を列挙するばかりでなく、他の地域や資本主義体制下の社会と比較しうる議論の建て方をし、積極的に発言していくことを期待したいからである。このことは、ポスト社会主義圏人類学をさらに活性化するに違いない。また、そのようにして社会主義体制についての理解が深まることは、近代化の尺度や近代化論そのものを改良し、議論を深めていく上でも不可欠の作業となるであろう。

謝 辞

本稿の元となった調査は、日本学術振興会の平成13-15年度特別研究員に対する助成金および財団法人日本科学協会の平成16年度笹川科学研究助成によって可能となった。調査地ではN.ガニシエルさんをはじめ、多くの方々が協力して下さった。執筆に当たっては船曳建夫先生、渡邊日日先生、松前もゆる先生、細田尚子さん、高橋絵里香さんの各氏に有益なアドバイスをいただいた。英語要旨の作成にはChikina Oksanaさんの助力を得た。また、草稿は北海道大学スラブ研究センターの北海道中央ユーラシア研究会（主催・宇山智彦助教授）で発表し、参加者の方々から貴重なコメントをいただいた。この他、3名の匿名査読者の方々にも懇切丁寧な指導を受けた。ここに記して心からの謝意を表する。

注

- 1) ロシア語では *sovetskaya etnografiya*、直訳すると「ソヴィエト民族誌学」となる。しかしこれは「民族誌学」という言葉のイメージに反して、ソ連の学問体系においては記述的側面のみならず理論的側面も持つ分野であった。そのため、これまで慣例として「ソヴィエト民族学」と訳されてきた経緯がある。本稿でも「ソヴィエト民族学」と訳すこととする。
- 2) リシトン陶業に関する調査は2002年12月、2003年2月-7月、9月-11月の約10ヶ月間で延べ約100人、1人当たり1時間程度のウズベク語を使用した聞き取りを主に行った。この他、陶芸の現場への参与観察を約9ヶ月間行い、それらと平行してソヴィエト民族学などの先行研究の収集と分析を行った。2004年2月、9月には追加調査を行った。
- 3) ソ連時代から現在にかけてのウズベキスタンを中心とした中央アジアのジェンダー研究の動向については（菊田2001, 2003）で簡単にまとめている。なお、ウズベキスタンではないが、タジキスタンにおけるジェンダーと地域社会の秩序構造について数年間のフィールドワークに基づいて考察した（Harris 2004）も、近年の注目の書である。
- 4) ロシア語では「リシタン」あるいは「リシュタン」と発音されるが、本稿では現在の住民の発音に最も近いと思われる「リシトン」を採用した。本稿に登場する他の地名に比べてリシトンの日本での知名度は低く、慣例の読み縛られる必要が少なくと判断したためである。そして以下、特に断りなくリシトンと言う場合は、リシトン郡ではなくリシトン市を指す。
- 5) フェルガナはウズベク語では *Farg'ona* すなわち「ファルゴナ」に近い発音となるが、本

- 稿では以下の地名も含め、広く普及した慣例に従った読み方でカタカナ表記する。
- 6) 以下、本稿での現在や今日という表現は、「民族誌的現在」すなわち調査時を指す。
 - 7) ウスタコールとハリファの双方をウスタ (*usta*) と表現することも多かったようであるが、混乱を避けるために、本稿では20世紀初頭の状況を述べる際にはウスタという語を用いず、ウスタコールとハリファの区別を明確にする。
 - 8) クルアーン (コーラン) の開扉章のこと。
 - 9) ただし、陶工の内部で、成形は元クザガルの某氏が巧みで、絵付けは元タヴォクチの某氏が得意といった区別は残り、これが現在見られるような、他の陶工から成形を依頼されるクザガルと、専ら絵付けをするナッコシユ (*naqqosh*) の区別へとつながっていったと見られる。
 - 10) 筆者の調査時点で既にハリファという単語を知っている陶工に出会うことはなかった。
 - 11) ソ連崩壊以後のリシトン陶業の様子については (菊田 2005) で触れている。

文 献

外国語文献

(ロシア語、ウズベク語文献のタイトルには和訳を付す。キリル文字のラテン文字への転写は (小松他監修 2005: 592-593) に従ったが、英訳論文の著者名は原著の転写のままである)

Abramson, D.

1998 *From Soviet to Mahalla: Community and Transition in Post-Soviet Uzbekistan*. Ann Arbor: UMI Dissertation Services.

Akiner, S.

1997 *Between Tradition and Modernity: The Dilemma Facing Contemporary Central Asian Women*. In M. Buckley (ed.) *Post-Soviet Women: From the Baltic to Central Asia*, pp. 261-304. Cambridge: Cambridge University Press.

Alieva, S. and A. Khakimov

1999 *Ceramics*. In A. A. Khakimov et al. (eds.) *Atlas of Central Asian Artistic Crafts and Trades*, pp. 11-19. Tashkent: Sharq.

Bikzhanova, M. A., K. L. Zadykhina and O. A. Sukhareva

1974[1962] *Social and Family Life of the Uzbeks*. In S. P. Dunn and E. Dunn (eds.) *Introduction to Soviet Ethnography* (vol. 1), pp. 239-271. Berkeley: HRSS Research Station.

Bromley, J. and V. Kozlov

1989 *The Theory of Ethnos and Ethnic Process in Soviet Social Sciences*. *Comparative Studies in Society and History* 31: 425-438.

Burxonov, H.

1983 *Rishton mo'jizasi* (リシトンの奇跡). Tashkent: O'zbekiston.

CIA Factbook

2005 <http://www.cia.gov/cia/publications/factbook/geos/uz.html> (2005年1月7日アクセス)

Dunn, S. P. and E. Dunn

1974 *The Intellectual Tradition of Soviet Ethnography*. In S. P. Dunn and E. Dunn (eds.) *Introduction to Soviet Ethnography* (vol. 1), pp. 1-53. Berkeley: HRSS Research Station.

Hann, C. M. (ed.)

2002 *Postsocialism: Ideals, Ideologies and Practices in Eurasia*. London and New York: Routledge.

Harris, C.

2004 *Control and Subversion: Gender Relations in Tajikistan*. London and Sterling: Pluto Press.

Ilkhamov, A.

2001 *Impoverishment of the Masses in the Transition Period: Signs of an Emerging 'New Poor' Identity in Uzbekistan*. *Central Asian Survey* 20(1): 33-54.

Iqtisodiyot va Statistika bo'limlari

2001 *O'zbekiston Respublikasi Farg'ona viloyati Rishton tumani Pasporti* (ウズベキスタン共和国フェルガナ州リシトン郡パスポート). Rishton.

- Kamp, M.
2001 Remembering the Hujim: Uzbek Women's Words. *Central Asia Monitor* (1): 1–12.
- Khazanov, A.
1990 The Ethnic Situation in the Soviet Union as Reflected in Soviet Anthropology. *Cahiers du Monde russe et soviétique* XXXI(2-3): 213–222.
- Kodzaeva, L. X-M.
1998 *Keramika Rishkana, traditsii i mastera* (リシトンの陶器：伝統と熟練職人). Tashkent: Institut Otkrytoe Obshchestvo.
- Koroteyeva, V. and E. Makarova
1998 Money and Social Connections in the Soviet and Post-Soviet Uzbek City. *Central Asian Survey* 17(4): 579–596.
- Mirzaakhmedov, D.
1990 *K istorii khudozhestvennoi kul'tury Bukhary, remeslo keramistov XVII–nachala XX v.* (ブハラ芸術文化史に関して、17世紀から20世紀初頭の陶業). Tashkent: Izdatel'stvo Akademii nauk UzSSR.
- Mukminova, R. G.
1976 *Ocherki po istorii remesla v Samarkande i Bukhara v XVI veke* (16世紀のサマルカンドとブハラにおける手工業史概説). Tashkent: Izdatel'stvo Akademii nauk UzSSR.
- Northrop, D.
2004 *Veiled Empire: Gender and Power in Stalinist Central Asia*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Nunn, S. S., B. R. Rubin and N. Lubin
1999 *Calming the Ferghana Valley: Development and Dialogue in the Heart of Central Asia*. New York: The Century Foundation Press.
- Peshchereva, E. M.
1959 *Goncharnoe proizvodstvo Srednei Azii* (中央アジアの製陶業). Moskva i Leningrad: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR.
- Poliakov, S. P.
1992[1984] *Everyday Islam: Religion and Tradition in Rural Central Asia*. Armonk: M. E. Shape.
- Privratsky, B. G.
2001 *Muslim Turkistan: Kazak Religion and Collective Memory*. Richmond: Curzon.
- Rakhimov, M. K.
1961 *Khudozhestvennaya keramika Uzbekistana* (ウズベキスタンの芸術的陶器). Tashkent: Izdatel'stvo Akademii nauk UzSSR.
- Raximov, M. K.
1974 Bugungi kulolchilik (今日の陶業). *O'zbekiston madaniyati* (新聞 ウズベキスタンの文化), 15th, November, p. 2.
- Rukavishnikov, V. O.
1996 Sociological Aspects of the Modernization of Russia and Other Postcommunist Societies. *Russian Social Science Review* 37(2): 37–57.
- Sadomskaya, N.
1990 Soviet Anthropology and Contemporary Rituals. *Cahiers du Monde russe et soviétique* XXXI(2-3): 245–254.
- Sukhareva, O. A.
1962 *Pozdnefeodal'nyi gorod Bukhara kontsa XIX–nachala XX veka: Remeslennaya promyshlennost'* (19世紀末–20世紀初頭の後期封建制都市ブハラ：手工業). Tashkent: Izdatel'stvo Akademii nauk UzSSR.
- Zadykhina, K. L.
1963[1960] Empirical Studies of Worker Communities. *Soviet Sociology* 1(4): 10–19; 2(1): 36–47.
- Zhadova, L. A.
1974 Polivnaya keramika (施釉陶器). In L. S. Bubnova (ed.), *Sovremennaya keramika narodnykh masterov Srednei Azii* (中央アジア人民職人の当代の陶器), pp. 15–26. Moskva: Sovetskii Khudozhnik.

日本語文献

樋渡雅人

- 2004 「ウズベキスタンの慣習経済——マハッラの共同体的機能の検討から」『アジア研究』50(4): 79-97。

ホール, J. W.

- 1961 「日本の近代化——概念構成の諸問題」『思想』439: 40-48。

石原美奈子

- 2002 「伝統と近代」綾部恒雄編『文化人類学最新述語 100』pp. 124-125, 東京: 弘文堂。

菊田 悠

- 2001 『宗教的資源の多元的活用モデル——20世紀ウズベキスタンのイスラームを事例に』平成12年度東京大学大学院総合文化研究科修士学位論文。

- 2003 「一つの生活世界, 二つの信仰実践——ポスト社会主義圏におけるイスラームとジェンダー」佐々木史郎編『ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究——民族誌記述と社会モデル構築のための方法論的・比較論的考察』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C-2研究成果報告書 pp. 159-171。

- 2005 「変化の中の「伝統」解釈と実践——ポスト・ソヴィエト期ウズベキスタンの陶工の事例より」『アジア経済』46(9): 42-61。

木村英亮

- 1999 『ロシア現代史と中央アジア』東京: 有信堂。

- 2005 「土地水利改革」小松久男他監修『中央ユーラシアを知る事典』pp. 383, 東京: 平凡社。

小松久男他監修

- 2005 『中央ユーラシアを知る事典』東京: 平凡社。

松前もゆる

- 2003 「儀礼の変遷と集団意識——ブルガリア中北部におけるムスリムと正教徒」佐々木史郎編『ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究——民族誌記述と社会モデル構築のための方法論的・比較論的考察』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C-2研究成果報告書 pp. 201-211。

メドヴェージェフ, Z. A.

- 1995[1994]『ソヴィエト農業1917-1991——集団化と農工複合の帰結』佐々木洋訳, 札幌: 北海道大学図書刊行会。

中村泰三

- 2004 「ソ連時代の共和国経済——計画経済体制下の中央アジア地域開発」岩崎一郎・宇山智彦・小松久男編『現代中央アジア論——変貌する政治・経済の深層』pp. 155-175, 東京: 日本評論社。

帯谷知可

- 2002 「ウズベキスタンの新しい歴史——ソ連解体後の「国史」叙述のいま」森明子編『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話』pp. 146-169, 京都: 人文書院。

- 2005 「民族・共和国境界画定」小松久男他監修『中央ユーラシアを知る事典』pp. 493-496, 東京: 平凡社。

佐々木史郎

- 2004 「ポスト社会主義人類学」『民博通信』106: 34。

須田 将

- 2005 「「市民」たちの管理と自発的服従——ウズベキスタンのマハッラ」『国際政治』138: 43-71。

杉村 棟

- 1999a 「中央アジアのイスラーム陶器と中国陶磁器」『シルクロード学研究7 シルクロード学研究センター研究紀要』pp. 1-4。

- 1999b 「イスラーム陶器」長谷部楽爾監修『世界やきもの史』pp. 103-118, 東京: 美術出版社。

高倉浩樹

- 2000 『社会主義の民族誌——シベリア・トナカイ飼育の風景』東京: 東京都立大学出版会。

高島善哉

- 1968 「近代化とは何か——この問題への社会科学的接近のための一考察」関東学院大学大

学院経済学研究科編『近代化の社会経済理論』pp. 7-43, 東京:新評論社。

渡邊日日

- 2002 「移行期社会の解釈から諸概念の再構成へ——ユーラシア社会人類学研究の観察」『ロシア史研究』70: 41-61。
- 2003 「ポスト社会主義研究の理論的基準をめぐるメモランダム」佐々木史郎編『ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究——民族誌記述と社会モデル構築のための方法論的・比較論的考察』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C-2研究成果報告書 pp. 5-19。

吉田世津子

- 2004 『中央アジア農村の親族ネットワーク——クルグズスタン・経済移行の人類学的研究』東京:風響社。



写真1 20世紀初頭のリシトン陶器の大皿
(2003年撮影)

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真2 ソ連時代後期の工場で活躍したあるウスタとその製品 (2003年撮影)

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真3 1980年代にイジョーディー・グループを指導したウスタの一人と当時の製品 (2003年撮影)

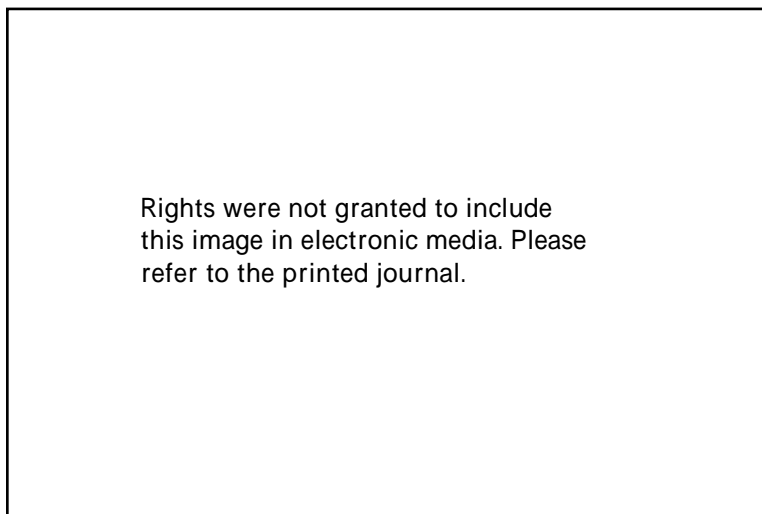


写真4 ソ連時代後期の工場内の一コマ。女性も働いている。(2003年撮影)